純ちゃんのコーナー

（ロータリー３分間情報）

Part XVI

伊丹ロータリークラブ

深　川　純　一

目　　次

1.「ロータリー思想の理論構造」その１ …… 2
2.「ロータリー思想の理論構造」その２ …… 3
3.「ロータリー思想の理論構造」その３ …… 4
4.「ロータリー思想の理論構造」その４ …… 5
5.「ロータリー思想の理論構造」その５ …… 6
6.「ロータリー思想の理論構造」その６ …… 7
7.「ロータリー思想の理論構造」その７ …… 8
8.「ロータリー思想の理論構造」その８ …… 9
9.「ロータリー思想の理論構造」その９ …… 10
10.「ロータリー思想の理論構造」その１０ …… 11
11.「ロータリー思想の理論構造」その１１ …… 12
12.「ロータリー思想の理論構造」その１２ …… 13
13.「ロータリー思想の理論構造」その１３ …… 14
14.「ロータリー思想の理論構造」その１４ …… 15
15.「ロータリー思想の理論構造」その１５ …… 16
16 「ロータリー思想の理論構造」その１６ …… 17
17.「ロータリー思想の理論構造」その１７ …… 18
18.「ロータリー思想の理論構造」その１８ …… 19
19.「ロータリー思想の理論構造」その１９ …… 20
20.「ロータリー思想の理論構造」その２０ …… 21
21.「ロータリー思想の理論構造」その２１ …… 22
22.「ロータリー思想の理論構造」その２２ …… 23
23.「ロータリー思想の理論構造」その２３ …… 24
24.『職業奉仕・この素晴らしきもの』 …… 25
東京２５８０地区職業奉仕委員会講演
25.「ＲＹＬＡの真髄～人間の魂の在り方～」 …… 46
ＲＹＬＡ学友会創立１０周年記念講演

序　に　か　え　て

竹中秀夫会員の発案によって始まった「純ちゃんのコーナー」も、１６冊目を発刊する運びとなりました。その間、１６年の月日が流れたことになります。

毎年、色々のテーマを取り上げて参りましたが、今年度は一年間を通して、一貫して、「ロータリー思想の理論構造」というテーマでお話し致しました。

「ロータリー思想の理論構造」。このテーマによる論説は、何時かは書いてみたいと思い、また、書かねばならぬと思い定めていました。何故かと申しますと、このテーマは、私のロータリーの恩師小堀憲助先生が、ロータリーの研究会である千種会を立ち上げられたときの基本原稿であったからであります。

小堀先生は、博覧強記の該博な知識と共に法律家としての緻密な原理分析によって、ロータリー思想の原理体系を築き上げられた人であります。

ただ、小堀先生も千種会創立当時は、まだその研究が完成していない部分もありました。それが１９２３年のセントルイスの国際大会における３４号決議、即ち、ロータリーにおける般若心経とも云うべき「決議２３－３４号」であります。これについての論説は、当然の事ながら「ロータリー思想の理論構造」の原本には記述がありません。したがって、その後、先生が「決議２３－３４号」を補完されることによって、先生のロータリーの原理体系が完成したわけであります。

敢えて云えば、小堀先生によって、初めて２０世紀初頭の様々なロータリー思想が日本ロータリーに紹介されたと謂えるのであります。

何はともあれ、２０世紀初頭のロータリーの世界には、Paul P.Harris を始め、様々な素晴らしい思想家が犇めいていたのであります。そのような異なる思想がお互いに他の思想を排斥することなく、滔々と流れる大河の如く、今日に到っているのであります。したがって、ロータリー百年余りの歴史を顧みるとき、どの時点においても、恰も満天に輝く星の如く、様々な思想の混在が見られるのであります。これが将にロータリー思想の特色であります。いみじくもハロルド･トーマスが名付けたように、「ロータリー・モザイク」というべきものであります。

このようにして、ロータリー思想を一義的に割切ることは出来ません。何時も寛容の心をもって、自分と異なる思想の存在を認め、自分の到らざるところを謙虚に学ぶ姿勢が必要であろうかと思うのであります。

なお、この原稿を書き終えた６月、恩師小堀憲助先生がこの世を去られました。何か因縁めいたものを感ずるのであります。只々悲しく、只々淋しく思います。心から哀悼の祈りを捧げますと共に御冥福をお祈り申し上げる次第であります。

終わりにあたりまして、雑誌・ロータリー情報委員長中山行夫会員、並びに事務局の吉永惠子さんほかスタッフの皆さんには、大変お世話様になりました。心から感謝しております。有り難うございました。

深　川　純　一

1.「ロータリー思想の理論構造」その１

今回から「ロータリー思想の理論構造」というテーマでお話したいと思います。実は、このテーマは、嘗て私のロータリーの恩師小堀憲助先生が解説されたものであり、かなり難解であり且つ長時間を要します。そこで、ロータリー思想の理論構造というものについて私なりに理解出来たところをお話したいと思います。

そこで、初めに話の大まかな内容を紹介しておきたいと思います。

先ず、ロータリー思想の理論構造とは、簡単に云えば、「ロータリーとは何か」を問うことであります。或いは、職業奉仕の実体は何かを探求しても同じ結論になります。実は、一言でロータリー思想の理論構造と申しましても、その実体は、意外に複雑なのであります。例えば、ロータリーの中心概念である親睦と奉仕にしても、親睦というものを、酒を飲んだりゴルフをするような感性的親睦と考えている人もあれば、例会で自己研鑽、切磋琢磨をする精神的親睦こそ、ロータリーの親睦だと考えている人もいます。したがって、親睦一つ取り上げても、その実体は複雑でありますから、ロータリー思想の話は、これを正しく理解しようと努力しなければ、その実体を明らかにすることは出来ないことになるのであります。

そこで、大事なことは、ロータリーが個人奉仕を中心とする社交団体であるということを理解し、一人々々のロータリアンとそれぞれのロータリークラブが「ロータリーとは何か」ということを大悟徹底しなければなりません。そうでないと混沌とした無理解の世界に紛れ込んでしまうことになると思います。

また、更に申しますと、ロータリー思想自体の中にも固有の難しさがあります。

それは、ロータリー思想の無限性とでも謂うべきものであります。この点は、１９０５年にロータリークラブが創立されて以来、ロータリー思想は一瞬にして出来上がったものではなく、最初は零細業者達が、お互い仲良くなって助け合うという物質的相互扶助から始まり、やがて企業経営上の諸々のアイディアを交換するという精神的相互扶助が生まれ、更に親睦だけの助け合い運動から、やがて漠然たる社会的意義を自覚し、１９０８年になると、奉仕という思想を生み出すに至るのであります。そして、これについての理論的分析は、１９１５年から１９２３年頃まで多角的に続けられたのでありますが、その後においても、ロータリーにおける奉仕という思想の追求は、今日に到るまで続けられて来たわけでありまして、更に、今後も未来永劫にわたって続けられなければならないのであります。

このようにして、歴史の流れの中の現在を、一断面として分析したロータリー思想というものは、必然的に部分的且つ断片的にならざるを得ないのでありまして、理論体系というには余りにも不完全なものにならざるを得ないのであります。

しかし、今日までに解明されてきた諸々の思想も真に素晴らしいものが多く、これら先輩の理論的努力を知るだけでも相当膨大な思想を理解することが出来るわけであります。そこで以後、これら先輩の業績を紹介したいと思います。

2.「ロータリー思想の理論構造」その２

今日は、前回にひき続いてロータリー思想に関する先輩ロータリアン達の業績について紹介したいと思います。

先ず第１に採り挙げなければならないのは、１９１５年、サンフランシスコの国際大会の決議に基づいて、フィラデルフィアクラブ会員Guy Gundaker（ガイ ガンディカー）が著した「ロータリー通解」であります。その理論的解説の緻密にして純粋なことは、他に類を見ないものであります。この著書には、小堀憲助氏の翻訳本があります。

第２に、挙げられるのは、ロータリーの創始者Paul P.Harris（ポール ハリス）の「ロータリーの理想と友愛」であります。これも、日本ロータリーの創始者米山梅吉氏の翻訳本があり、これは文章のスタイルは古いものでありますが実に名訳であります。

第３に、元 国際ロータリー会長Percy（パーシー）Hodgson（ホジソン）の手になる「奉仕こそわが務め」があります。これも、理論と実践とを結びつけた優れた解説書であります。

このような外国人の手になる解説書のほかに、日本のロータリアンによる名著もいくつかあります。

先ず、ロータリーを東洋倫理をもって説いた最高の名著として、今治クラブが生んだロータリーの聖者森光繁氏の「ロータリーの本」があります。これは主として、ロータリーの綱領についての解説でありますが、その背後にロータリー思想の正確にして深い理想的な解説が行われているものであります。

また、これ以前にも、ロータリーの組織を理論的に解説した神戸クラブの長老小菅金造氏の「国際ロータリーとは」があります。

その後、長い間、ロータリーの理論的解説書は、世に出ることはなかったのでありますが、１９６８年、小堀憲助氏の手になる「ロータリークラブ・その理論と実践と批判」が出版されました。これは、ロータリー理論の体系的解説書と謂うべきものであります。この本は、元来、ロータリアンに対して書かれたものではありませんが、ロータリー運動全般の体系的解説でありまして、その第三章は、ロータリー思想の理論構造の解説に当てられているのであります。

また、この頃、ロータリー思想の境地の深さを物語る名著として断然群を抜いているのが、神戸クラブの長老直木太一郎氏の「ロータリアン読本」であります。これは、僅か４０頁にロータリーの理論を見事にまとめ上げた素晴らしいものであります。

このほかにも、ガバナー在任中の諸々の所信の表明の中からロータリーの原理と実践を説いた著作として二つの名著があります。一つは、世界社会奉仕の正統派理論を説いた姫路クラブの長老斎木亀治郎氏の「信天翁よちよち歩く」であり、一つは、正統派ロータリー理論を説いた桐生クラブの長老前原勝樹氏の「前原ガバナー講話集」があり、そのほかにも指導的ロータリアンの著作が数々ありますが、ロータリー思想を説くものは意外に少ないのであります。

3.「ロータリー思想の理論構造」その３

前回は、ロータリアンの著作の中でロータリー思想を説いたものは意外に少ないと謂うことを申し上げました。それは、Guy Gundaker（ガイ ガンディカー）、Paul P.Harris（ポール ハリス）、Percy Hodgson（パーシー ホジソン）、直木太一郎氏、小堀憲助氏以外の著作は、体系的な解説とは云えないからであります。

何れにしても、ロータリーというものは、地域社会の職業人の様々なアイディアをお互いに交換させ、その発想の交換による新たな発想が地域社会の発展に役立つと謂う考え方であります。そこで、ロータリーは、このような様々な考え方を比較し、或いはこれを認め、或いは認めないで、更に高次元のものに昇華させるところの哲学であります。したがって、ロータリーは、ロータリークラブとロータリアンの自由な発想がある限り、絶対に無くなることはありません。ロータリー思想は、無限に亘って続くであろうと思われるのであります。

このことはまた、特定の時、特定の場所におけるロータリアンの思想が必然的に不完全なものとならざるを得ないことをも意味するわけであります。

次に、ロータリー思想の理解を難しくしていることの一つに、クラブにおける一人々々のロータリアンの奉仕活動が意外に複雑であると謂うことがあります。例えば、ロータリーは個人奉仕が中心であると云うので日常生活に気を配っていると、例会に出席しなければならないと謂います。そこで、例会に対して何かの提案をすると、理事会に先議権があると謂います。そこで、委員会で頑張っていると、他の委員会や理事会との連携が大事だと謂われます。

つまり、個人奉仕そのものが、一度クラブの中を回ってから、また個人奉仕に戻らなければならないという仕組みになっているのであります。このクラブ内での絡み合いが、ロータリー的意味での切磋琢磨なのであります。したがって、これに付随して団体奉仕が採られることもあるのであります。

また、ロータリーは奉仕団体だと謂われて奉仕に重点を置くと、親睦を基礎とすべきだと謂われます。さればと親睦に重点を置くと、奉仕に直結しなければならないと謂われます。このような視点から見ますと、ロータリアン一人々々に課せられた責任は、クラブ組織との絡み合いにおいて、一面的に把握することは出来ないということを意味するのであります。

このようにして、クラブ組織とロータリアンの奉仕との関係は、かなり複雑でありまして、ロータリー思想の理論構造というものがかなり理解し難いものになっているのであります。

以上を要するに、ロータリー思想との関係におけるロータリー運動というのは、一人々々のロータリアンが毎週一回の例会を通じて、職種の異なるフェロー・ロータリアンとお付き合いをしながら、自己研鑽、切磋琢磨によって自らの精神世界を高めていくというところに、この運動の真骨頂があるのであります。

4.「ロータリー思想の理論構造」その４

今回は、ロータリー思想の理論構造自体の複雑さについて、最後に一言申し述べておきたいと思います。それは、ロータリーは、一人々々のロータリアンの精神世界の追求を目的とする自己研鑽の運動でありますから、これをロータリー思想の視点から見ますと、ロータリーは宗教運動と非常に似ているところがあります。例えば、心に灯をともし、それをクラブ活動を通じて深めて行くと、その究極の場にロータリーが厳然として聳え立つというこの精神状態を、仏教では境地と呼ぶのでありますが、この境地を高める作業は、ロータリアン一人々々に課せられた責務なのであります。

この視点から見ますと、同じロータリアンであっても、境地の浅い人も居れば、仏教の聖者のような境地の深い人まで、将に多種多様な人が居られるわけであります。したがって、ロータリーは境地の浅い人にとっては単なる遊びの場としか映りませんが、境地の深い人には自己研鑽の道場として映るわけであります。

このようにロータリーというものは、ロータリアン一人々々にとって、それぞれの境地に応じて、多種多様なものとして捉えられることになるのであります。したがって、自分が今認識しているロータリーは、自分が高められていくという意味において、あくまでも仮のものにすぎませんから、常に反省し、謙虚な心を忘れてはならないのであります。ロータリーは謙虚を学ぶところであります。

さて、最後にロータリー思想は、実践されなければなりません。自己研鑽、切磋琢磨によって自分を高めることと同時に、それを日常生活に実践しなければならないわけであります。実は、このことについて、口では高邁な理想を説きながら、その実践においては、ロータリー的でない行動をとることによって、ロータリアンとしての指導力を失って行った人が如何に多かったか、枚挙に暇がないのであります。

このように、ロータリアンは、一方においては、日常生活とクラブ活動を基礎として理想を追求し、他方においては、同時に、その時々の心の状態に応じての理想の実践が要求されるのでありまして、このことを比喩的に謂えば、ロータリー思想は、あたかも世俗の世界を離れて、ひたすら仏法の奥義を窮める往相回向と、他方、自ら会得した悟りの境地を社会万般に対して適用する環相回向とを、日常生活において同時に要求するものなのであります。この視点から見ますと、ロータリー思想は、あたかも在家の仏教とよく似ているところがあるのであります。

したがって、ロータリー思想の随所に見られる「職業奉仕」という言葉は、屡々二つの意味に用いられます。一つは、ロータリアンが職業の管理者として自らを高める心の状態の意味であり、一つは、高められた心の状態を日常生活に実践する行動の意味であります。ロータリーは、理想を求めます。しかし、それは徒に天の星を求めず、足下の石を拾うものでなければならないのであります。

5.「ロータリー思想の理論構造」その５

今回は、ロータリー思想との関係では避けて通れない問題として、アメリカにおける三大奉仕クラブとの関係について申し述べます。

アメリカでロータリークラブが一般的奉仕クラブとして誕生したのは、１９０６年後半のことでありましたが、ロータリー運動がクラブ例会における会員相互の発想の交換ということを、一つの柱として会員個人の倫理を確立したのは、１９１５年のサンフランシスコの国際大会でありました。ただ、ロータリーがアメリカのみならず、ヨーロッパその他の地域にもロータリーを拡大するときに障害となったのは、「一業一会員制の原則」でありました。その一つの理由は、地域社会における同じ職種の職業人の中から一人が入会しますと、それ以外の奉仕の心を持った同業者が入会出来なくなるからであります。そこで、ロータリアン以外の奉仕家から見れば、もう一つ奉仕クラブを作るべき必要性を感じるわけであります。この立場から、「一業一会員制」を柱とした今一つのクラブとして誕生したのが「キワニス・クラブ」でありました。時に１９１５年のことでありました。

キワニスとは、アメリカ・インディアンの言葉でありまして、「自己顕示」を意味すると謂います。したがって、この言葉は、キワニス・クラブが個人奉仕を中心とする奉仕クラブであることを物語るものであります。即ち、自己研鑽によって得た財力を地域社会に投入し、そこで得られた成功と、社会的名声をクラブ活動を通じて社会に還元しようとする意図が「自己顕示」という言葉に籠められているからであります。

さて、そこで、キワニス・クラブとロータリークラブとの間に原理的な相異はないようであります。ただ、一つ異なる点は、会員選任の方法であります。キワニス・クラブが従来、会員資格の点でロータリーと異なっていたのは、市会議員その他の所謂「公選制」の職務に対して、会員資格を与えていることであります。

もっとも、この点はロータリーも１９６８年の国際大会において、事後的に取得された公選制の地位は、会員資格喪失の原因とされないようになりましたので、両者の差は若干縮められることにはなりました。

また、キワニス・クラブは、従来主としてアメリカ合衆国と、カナダにおいて運動が行われていたのでありますが、現在は、東京を初めとして、各都市にクラブが拡大されています。ただ、クラブ拡大の方法については、ロータリーと少し異なるようであります。ロータリーは、アメリカのシカゴ、ヒューストン、サンフランシスコ等のクラブは、原則として、大都市を一テリトリーとして一クラブを設立するという大テリトリー主義と、親クラブの下に沢山の子クラブを設立するという小テリトリー主義を採っているため、大小様々なクラブが混在するのでありますが、キワニス・クラブの日本における拡大の方法から見ますと、一都市・一クラブの大テリトリー主義がとられているように思われるのであります。

6.「ロータリー思想の理論構造」その６

今回は、ロータリー思想との関係でアメリカにおける三大奉仕クラブの一つであるライオンズ・クラブについて話します。

ライオンズ･クラブの創立は、ロータリー並びにキワニスの創立とは著しい対照を示します。「ライオンズ必携」によりますと、１９１７年にアメリカのテキサス州のダラスにおいて、当時、ロータリー以外の弱小クラブの会員であった保険代理業者のメルヴィン・ジョウンズ Melvin Jones という人が、その奉仕クラブの理論に疑問を持ち、奉仕する者は、理論を提唱するだけでなく，実践をしなければならないこと、更に、実践とは、社会が求めていることに対して金銭を給付することであると考えたのであります。

そこで、彼は、自分が所属していたクラブを退会し、彼の理論に基づく新しいクラブを創立したのであります。そのクラブの名は、自由・Libertyy, 知性・Intelligence, 愛国・Our Nation's Safety、の各頭文字をとって、ライオンズ・クラブ Lions Club と称したのであります。

このようにして、ライオンズ･クラブは、その基本的原理においては、ロータリーやキワニスと全く同じ基盤に立ちながら、その原理の実現方法については、反ロータリー、且つ反キワニス的立場をとるのであります。また、その会員資格については、キワニスと同じ「公選制是認」の態度をとりながらも、他方、クラブ活動の地域性については、ロータリーと同じ小テリトリー主義の態度をとるという、真に興味深い発展をしているのであります。なお、会員数の多寡から謂えば、ライオンズ、ロータリー、キワニスの順序となるのであります。

ところで、従来から、人或いはロータリーを貴しとし、ライオンズを低く見る傾向があるやに聞き及びますが、これは大変な誤りでありまして、ロータリーもライオンズも共に奉仕の理想を掲げて、世のため人のために動いているのであって、両者に価値の差があるわけでもなく、貴賤の差があるわけでもありません。謂うなれば、両者は、原理の実現方法の違いでありまして、富士山を東から登るか、西から登るかの違いであります。両者共に頂上の理想を目指していることには変わりはないのであります。

原理的に見れば、ロータリーは、個人奉仕が原則であり、精神的奉仕であり、非金銭的奉仕でありますが、ライオンズは、団体奉仕であり、即物的奉仕であり、金銭的奉仕であります。ライオンズの団体奉仕を提唱する有名なターゲットとして、"Not I serve, But We serve" があります。我々は個人としては奉仕しないが、団体として奉仕するというのであります。ロータリーと比較して、「何れを善しとし、何れを悪しとする」という問題ではないのであります。

以上を要するに、アメリカにおける三大奉仕クラブについて、それぞれの提唱する思想についてその原理的な差異を申し述べた次第であります。

7.「ロータリー思想の理論構造」その７

ロータリーは、職業人の生き様についての思考であります。したがって、ロータリー思想の理論構造を論ずるときに避けて通れない問題は、職業の本質の問題であります。日本国憲法は職業選択の自由を規定していますが、果たして現実の職業社会において選択の自由があるのか、本来、職業というものは自由に選べるものであるのに、現実にはそう簡単ではありません。それは、職業そのものが必然的に対人関係を必要とするものであることと、取引の成立、不成立が職業人の信用状態にも影響し、常に取引が自由に行われるとは限らないからであります。　ただ、職業の性質は、一般論として謂えば、このようなものであっても、人類の歴史を顧みますと、職業の在り方は、各時代の社会構造の変遷の影響を受けて居り、この点は今日においても変わるものではありません。

ヨーロッパの中世社会においては、封建制度の社会でありましたから、人々は、封建領主と支配・服従の関係に立ちます。したがって、その社会構造は，一人の封建領主を頂点として、ピラミッド状に底辺が拡がる構造となります。そこでは、人間と人間との間は平等ではなく、平等は同じ階層の人間の間にしか存在しなかったのであります。詰まり、封建領主は封建領主、自由人は自由人、奴隷は奴隷の間においてのみ平等であったに過ぎなかったのであります。ここに、近代社会が国民全体を人として平等の地位においているのと著しく異なる特質を見るのであります。

ただ、この縦の系列による人間の身分関係のほかに、横の系列による分類もあったのであります。中世人は、社会を構成する国民の階層を奴隷を除外して三つに分けたのであります。一つは、戦う階級としての武士であり、今一つは、祈る階級としての僧侶であり、最後に、働く階級としての農民であります。

封建制度の初期においては、生産手段が幼稚でありましたから、人々は、土地に結びつけられた農耕とそれに付随する生活必需品の自給自足体制、即ち、荘園制度の枠組みの中に位置づけられていましたので、職種もこの三種類で一応事足りたのであります。

ところが、やがて近代的な資本制度が僅かずつ現れるに到ったのは、荘園内部の生産技術の発達によって、物資の生産が余剰を生みだし、この余剰物資を交換することによって、人々がより豊かな生活を営もうとしたことに始まるのであります。この物々交換の中から、封建社会の異分子である商人階級が生まれ、また、職人技術による生産の必要から職人階級が生まれ出るに到ったのであります。我が国の所謂「士農工商」の分類も、ヨーロッパ的な類型とほぼ同じであります。

このような商人階級の誕生は、その財力や金融の発展、機械文明の発達、更には武力闘争の繰り返しから武士階級の弱体化によって、イギリスでは１７世紀中葉、フランスでは１８世紀末に封建社会は崩壊してしまったのであります。

8.「ロータリー思想の理論構造」その８

ロータリーは、職業を専門職業 prfession（現在は専門事業）と、実業 business（現在は事業）に分けています。これはロータリー思想の視点から見ると、中世ヨーロッパの職業観の残像であります。即ち、中世ヨーロッパでは僧侶を中心とする学問の分野の職業人と、商人を中心とする職業人との二つの区別が厳然として存在したのであります。

専門職業 prfession は、神に奉仕することを目的とするものであって、神学者、法律家、医師がこれに当たり、現在においても、この三つの専門職業の延長上にある大学教授その他の職業もこれに当たると考えられているのであります。

一方、実業 business は、その業務が金銭獲得を目的とするものでありますから、中世においては、社会的身分が低い取り扱いがなされたのであります。しかし、貨幣経済が発達するにつれて、厖大な財産を蓄積し、政治的発言力を強めて、今日では充実した実力を以て社会全般に亘って君臨するに到ったのであります。

中世社会における専門職業は、封建社会の正統な身分でありましたから、その生活の保障は、封建的な俸禄によって身分が保障されていたのであります。

これに対して、商人にはこのような保障がありませんでしたから、彼らは、本来封建制社会の枠外の職業、所謂溢（あぶ）れ者として扱われていたのであります。

実は、専門職業も末端の医師、裁判官、弁護士などは、比較的身分が低かったため、その多くの者には俸禄は与えられませんでしたから、彼らは，個々の医療行為や、裁判事務によって生計を立てなければなりませんでした。この点は、今日の何人かの医師やイギリスの法廷弁護士については、依然として守られているのであります。つまりこれらの者は、報酬の如何に拘わらず、自己の良心と真実についての全知識を投入することを義務付けられ、そのためにその言動に万貫の重みと、社会一般の尊敬を一身に集め、社会の良心になるに到ったのであります。

次に、ロータリー思想を正しく理解するために避けて通れない問題として、ロータリーの例会出席の強制があります。何故強制するのか、その理論的根拠は何か。この点を納得のいくように説明しないと、ロータリー運動は、非常に理不尽なものに見えます。現に例会出席の原理が判らないために、例会出席のために手術後のロータリアンを担架で例会場に運び込むという悲劇が起こるのであります。

ロータリーというものは、ロータリアンが例会で自己研鑽、切磋琢磨して奉仕の心をもって地域社会万般を潤すのであり、その中心の場が例会なのであります。

米山梅吉氏が「ロータリーの例会は人生の道場である」と謂った有名な言葉はこのことを意味するのであり、また、ガバナーの研修会場である国際協議会の会場の入り口には「入りて学び」Enter to learn、そして、出口には「出でて奉仕せよ」Go forth to serve、と書かれていることは、この考え方が正統なものであることを示しており、これはロータリー思想の中核にある言葉であります。

9.「ロータリー思想の理論構造」その９

今日は、ロータリー思想の理論構造の理念的意味は何か、という話を致します、ロータリーとは一体何か、と問われれば、それは一定の質の思想であります。それは、「利己と利他との調和を目的とする人生の哲学である」と謂われているものであり、一つの哲学思想なのであります。したがって、この中に二つの異質な要素を看取ることが出来るのであります。

一つは、クラブの管理運営に一人々々のロータリアンが自主性をもって皆で参加することであります。この団体的な行動を「クラブ親睦」とか「クラブ奉仕」と呼ぶのであります。そして、その本質的要素を分析することは、既に申し述べましたように、ロータリー思想の制度的な意味は何かを問うことでありました。

いま一つは、一人々々のロータリアンが、例会出席によって授けられた奉仕の心を、地域社会の日常生活万般に適用することであります。これが「奉仕の実践」であります。奉仕の実践をする場合, ロータリアンは、あくまでも個人として行動することが要求されているのでありまして、このロータリアンに行動の指針を与え、ロータリーの理想像を示すことによって、一人々々のロータリアンの思想と、行動のルールを簡潔に示そうとするものがロータリーの理念なのであります。そして、ここでは、ロータリーが従来開発してきた諸々の理念が、一体どのような意味を持つのか、ということを分析します。そして、その諸々の理念の全体が、従来提唱された人類の思想の中でどのような特色を持つのか、ということを明らかにしたいと思うのであります。ロータリーは、初期の時代から色々な機会に、色々な角度から、色々な表現をもって、色々な理念の表明を行ってきました。その中には、国際大会の正式の決議もあり、また、指導的ロータリアンの開発した理念が、国際ロータリー理事会の力を背景にして全世界のロータリークラブの理念として提唱せられたものもあるのであります。

その中で最も大事なものに「ロータリーの目的」があります。これは「純ちゃんのコーナー」第１４巻において詳述していますのでここでは割愛しますが、これは、最近まで格調高く「ロータリーの綱領」と翻訳されていたものであります。

ロータリーの目的は、クラブが奉仕の理想を提唱するものではあっても、自ら奉仕を実践すべき団体ではないことを規定しています。ロータリーは、例会でロータリアンに奉仕の心を育てますが、クラブ自体は奉仕団体ではありません。奉仕を実践するのは、一人々々のロータリアンなのであります。したがって、奉仕の理想の追求は、あくまでも一人々々のロータリアンの良心に待たなければなりません。ロータリーは、統制団体ではないのであります。ただ、クラブ全体が奉仕の追求に燃えている時、何処のクラブにもいる不心得者、所謂、出来るだけ例会に出たくないように見える人に対しても、ロータリアンは冷淡であってはなりません。これを温かく遇するのがロータリアンなのであります。

10.「ロータリー思想の理論構造」その１０

前回は、ロータリー思想の理念的意味について、先ず、「ロータリーの目的」の話を致しました。そこで、次は、「ロータリーの標語」であります。

その代表的なものは、１９１０年の全米ロータリークラブ連合会において、Benjamin Franklin Collins（ベンジャミン フランクリン コリンズ）の提唱にかかる"Service,Not self「自己犠牲の奉仕」とArthur Frederic Sheldon（アーサー フレデリック シェルドン）の提唱にかかる"He profits most who serves best"「最も良く奉仕する者は、最も良く報いられる」と謂う二つの標語であります。

ただ、このSheldonの標語については、「純ちゃんのコーナー」第３巻の最後部に「ロータリーのモットー」として１８頁から２２頁まで５回にわたって解説していますが、更に、若干の補足をしておきます。

実は、Sheldonの提唱した標語は、手続要覧の日本語の翻訳が「奉仕する者は、精神的にも物質的にも良い報いがある」という意味に訳されています。

しかし、この解釈は、Sheldon自身によって否定されているのであります。即ち、ニューヨーク州ロチェスターの牧師が、教会の講師にSheldonを招いて紹介したとき、この標語に触れて、profits を精神的な報いがあるという意味で解説をしたところ、Sheldonはこれを否定して「自分はもっと物質的な意味でこの言葉を使ったのであって、この標語は、『奉仕に徹すれば儲かる』という意味である」と解説しているのであります。したがって、手続要覧の日本語訳は、正しくないことを申し添えておきます。

また、この標語に対しては、「奉仕を餌にして儲けを得るという卑しい心を示すものである」と非難される余地があり、１９４９年の国際大会では、この種の発言がイギリスのロータリアンから相次いだと謂われています。

しかしまた、これに対して、１９５０年のデトロイトの国際大会では、逆にアメリカのロータリアンから、この標語をロータリーの正式標語とするべし、との制定案が提出され、"Service above self"と共に可決されたという興味深い事実があります。

また、１９７１年度の国際ロータリー理事会は、"Service above self"を全面に立て、"He profits most who serves best"の使用を出来るだけ差し控える旨の決議をしていることも、このprofitsという言葉が、とかく誤解を招くということであります。このような国際ロータリー側の態度の変化は、この標語に対する評価が時代と共に変わるものであることを如実に示しているのであります。

なお、この二つの標語を東洋倫理の側から眺めて見ますと、極めて独自な方法ではあるが同質の思想を見取ることが出来ます。例えば、二宮尊徳の湯船の教え、「湯船の湯を己の方に掻けば、湯は己の方に来るが、皆向こうへ流れ帰る。湯を向こうへ押せば向こうへ行くが又わが方へ流れ帰る。これ天理なり」という話や中国の易経に「積善の家に余慶あり」というのも同質の思想であります。

11.「ロータリー思想の理論構造」その１１

前回は、ロータリーの代表的な標語としてSheldonの標語について話しました。そこで、今日は、Collinsの標語"Service,Not self「自己犠牲の奉仕」の話をします。実は、アメリカにおけるロータリーを育てた大きな勢力は、銀行家、弁護士、医師の三つの職種が大勢を握っていたと謂われています。

先ず、中世ヨーロッパの職種について謂いますと、最初は僧侶、即ち、神父が司っていましたが、神学の中から専門分化のラインに従って、先ず医学が分化し、次いで法学が分化し、最後に残ったのか哲学でありました。

このような歴史がありますから、神学、医学、法学の三つは聖職者中の聖職者であると謂うことが出来るのであり、ものの見方が一段と鋭いのであります。

例えば、１９１２年に全米ロータリークラブ連合会会長となった弁護士のGlenn C. Meed、１９１３年に全米ロータリークラブ連合会会長となったRussel F. Greiner、１９１５年に全米ロータリークラブ連合会会長となった内科医師のDr.Allen D. Albert、そして１９２３年に国際ロータリー会長となった弁護士のGuy Gundaker等々。

これらの人達は、Sheldonの考え方とは異なる考え方を持っていました。即ち、『我々はロータリーとは何ぞや、と問うている。それに対して、一業一会員制の原則をもって選ばれた職業人の自己研鑽のエネルギー、それが職業的な社会生活を潤す、と言う。つまり、先ず、第一に自己研鑽。そしてその結果が職業的な社会生活を潤す、というのであるが。これでは、世界は二つに割れている。考え方の元は一つであるべきである。』と謂うのであります。

そこで、ロータリーの本質を一言で問う。その答えは、『ロータリーのロータリーたる所以は、クラブ親睦の中にある』

例会におけるクラブ親睦のエネルギーは、例会を離れた後で職業社会を潤すこともある、これ即ち職業奉仕。また、職業と関係のない地域社会を潤すこともある、即ち社会奉仕。また、国際社会を潤すこともある、即ち国際奉仕。したがって、職業奉仕というものは、親睦で得た奉仕の心を適用する場面の一分野でしかない。法律家はこれを余後効という。要するに、効果の一つでしかない。

このように考えて見ると、『ロータリーのロータリーたる所以は、ロータリー運動の本体であるクラブ親睦にある』詰まり、親睦が本体であって、他のものはその心の適用でしかない、というのであります。したがって、１９１５年度の国際ロータリークラブ連合会会長Dr.Allen D. Albertは謂いました。『ロータリーのロータリーたる所以は、一業一会員制の原則をもって選ばれた良質な職業人の実力の涵養且つ人格の形成の中に宿る』と。『実力の涵養且つ人格の形成、これこそロータリーの目的である。』という有名なスピーチをしているのであります。「ロータリーの目的」は、将にこの一言の中にあるというのであります。

12.「ロータリー思想の理論構造」その１２

前回は、１９１５年度の国際ロータリークラブ連合会会長 Dr.Allen D. Albert の有名な言葉を紹介しました。『ロータリーのロータリーたる所以は、一業一会員制の原則をもって選ばれた良質な職業人の実力の涵養且つ人格の形成の中に宿る』というのであります。これは、ロータリーの真髄を衝いた言葉であります。

一人々々のロータリアンが、既に良質な心を持っています。その良質な心をもって例会へ出る、そのことを通じて実力を涵養する、という形でロータリアンの人格が抜本的に良くなります。これがロータリー運動である、と謂うのであります。

ロータリーの奉仕とは、世のため人のためとは謂いますが、それは所詮、自分の心のことであります。世のため人のためという具合に、目が外へ向くのではなく、所詮は自分の心の状態の問題であります。

自分の心を高めることなくして、世のため人のために行動することなど出来るものではありません。世のため人のためにどのような行動をするのかを決める前に、先ず自分の心の認識能力を高めておくことが必要であります。そうでなければ、社会のニーズも、実践の仕方も判りません。したがって、この認識能力を高める場が、将にロータリークラブの例会なのであります。

Dr.Allen D. Albert は、このように説いた訳であります。これはロータリー思想の中で最も純度の高いものと謂えるのでありまして、将にその極致であります。詰まり、『実力の涵養且つ人格の形成』それはクラブの親睦によって作られる。したがって、『ロータリーのロータリーたる所以はクラブ親睦にあり』と説いたわけであります。

そこで、このクラブ親睦を実践の側から考えて、１９２７年のＲＩ理事会は、これをクラブ奉仕と呼んだのであります。したがって、ＲＩ理事会の今日一般に使われている言葉によれば、Dr.Allen D. Albert は、『ロータリーのロータリーたる所以は、クラブ奉仕にあり』と言ったことになるわけであります。したがって、彼は、『職業奉仕は、その心の発現形態の一類型にしか過ぎない。つまり、これは結果の一つであって、これを本質の中に取り込むことは、原因と結果とを混同するものであって、原理的な説明にはならない。一言で問うているのであるから、一言で答えなければならい』と彼は謂ったわけであります。

しかし、ＲＩ理事会は、この問いに対しては未だに適確な回答を与えていないのであります。

要するに、ロータリーの奉仕というのは、考えてみると意外に難しいものでありまして、ロータリーは、例会に出て居れば判るとか、至極常識的なものである、とか云うことでは、全然説明にならないのであります。したがって、ロータリーの本質は、原理的に見れば見るほど難しいものであると思うのであります。

13.「ロータリー思想の理論構造」その１３

前回は、Dr.Allen D. Albert の考え方を紹介致しました。即ち、ロータリーは、『実力の涵養且つ人格の形成』の中に宿る、詰まり、ロータリーはクラブの親睦によって作られる。したがって、彼は、『ロータリーのロータリーたる所以は、クラブ親睦にあり』と説いたわけであります。

そして、彼と同じ考え方を提唱したのが、ミネアポリス・ロータリークラブの初代会長Benjamin Franklin Collins でありました。

Collins は、この考え方を頭の中に入れて１９１１年の全米ロータリークラブ連合会の大会において、"Service,Not self" 自己犠牲の奉仕という標語を発表したのであります。ただ、現在は、これが "Service above self" 超我の奉仕に変えられています。しかし、元来、ロータリーの奉仕は "Service,Not self" でありました。

これは、自己を滅却して神の司る宇宙の秩序体系のもとに帰依すること、これ即ち、ロータリーの奉仕である、という意味であります。詰まり、ひたすら自分の心を磨き自己研鑽を徹底して行くと、遂には、キリストの境地に近づくことが出来る、そのような高めれれた心で奉仕することがロータリーの奉仕である、と説いたのであります。したがって、ロータリーは宗教の一分派であると謂うことになります。したがって、"Service,Not self" という標語は、ロータリー・イコール宗教論を簡明直裁に表現したものであると理解すればよいのであります。

自己を滅却して、神の司る宇宙の秩序体系のもとに帰依すべし、これがロータリーの精神であり、ロータリーの真髄であるというのであります。

では、これに対して Paul Harris や Arthur Frederic Sheldon は、どのように考えていたのか。初期のロータリアンは、零細業者ばかりでありましたが、先ず、皆がお互いに仲良くなって心が通い合いました。そして、貧しい人達のために奉仕を始めたわけでありますが、やがて、金を集めることだけが奉仕なのだろうか、と反省するところがありました。

ロータリーの奉仕というものを、先ず金を沢山集めることであると考えますと、一業一会員制が邪魔になります。そこで、この制度を撤廃せよ、という考え方もあったのであります。しかし、結局、１９１１年オレゴン州ポートランドの全米ロータリークラブ連合会第２回大会において、ロータリーの奉仕の社会的実効性を担保するために、須く一業一会員制を採るべし、ということになったわけであります。これについての Sheldon の説明は、至極明快でありました。

例えば、仮に、会員数１万人のクラブを作った場合、それでも公共財源は不足します。しかも、会員１万人のクラブを作って例会場は一体どうするのか。第一、そのようなクラブで親睦は暖まるのか。親睦のないところに奉仕を考えることは出来ません。したがって、少数の人の最も良質な親睦が他の団体では果たし得ない社会改良のエネルギーになる、と Sheldon は言い切ったわけであります。

14.「ロータリー思想の理論構造」その１４

前回は、ロータリーの奉仕とは何か、ということについて、Sheldon が「少数の人の最も良質な親睦が、他の団体では果たし得ない社会改良のエネルギーになる」と断言したと申し上げました。

この Sheldon の提唱は、非常に面白いところでありまして、ロータリーの親睦というものを質の向上の世界の中に取り込むことになったわけであります。即ち、例会に集まる一人々々のロータリアンの考え方の質を向上させるということは、人間のパーソナリティを改善して、質的に高めていくことであります。これは、一つの職種から一人だけ会員を採ればこそ、このことが可能になるのである、と Sheldon は説いたわけであります。

同業者から一人、他の職種からも一人、この一人々々の親睦が、他の団体では果たすことの出来ない社会改良のエネルギーになる、と謂うのがロータリー運動の原理の本体を意味する、と Sheldon は考えたわけであります。

一業一会員制をもう一度考え直して見ますと、１９０５年時点では、親睦を保障するために同業者を排除しました。したがって、この時点では親睦だけあればよかった、詰まり、親睦の側から一業一会員制の原則は立てられていました。

しかし、１９０８年時点では、親睦は、世のため人のための奉仕と考えられるようになったのでありますから、一業一会員制の原則も奉仕の角度からもう一度分析しなければなりません。

Sheldon の分析は、次の通りであります。

第１に、地域社会における職業人の横断面を捉えます。そして地域社会の職業人の職種から、一つの職種について一人だけ会員を採ります。これがロータリークラブの社会制度としての使命であります。

第２に、質の保障の問題があります。或る特定の職種から一人だけ職業人を選んで、他の職業人を排除するのは何故か。その原理的な理由は一体何か。

それは質の保障であります。詰まり、良質な職業人をふるい篩にかけて選考して、ロータリー運動の中にプールするためであると考えるのであります。

では、何をもって良質というのか。ロータリーが質というのは、自分と他人とを包摂する判断の出来る人のことであります。人間は、人それぞれ個体としては別々でありますが、見る目をもってすれば、明らかに認識できる目に見えない紐によって結ばれている、そのような自覚を持たなければならない、詰まり、他人と分かつべき自分などというものは、正確な意味では存在しない。このような自覚を持つことが大切であると Sheldon は説きました。「目に見えない紐」。日本の先人達は、これを「因縁」と呼んでいます。例えば、因縁浅からざるものがある、という言い方があります。人間というものは、お互いに、見る目をもってすれば、明らかに自覚できる因縁によって結びつけられているというのであります。

15.「ロータリー思想の理論構造」その１５

前回は、一業一会員制の原則についてのSheldonの分析を紹介しました。前回の話の結びのところだけ要約しますと、一業一会員制の原則について、或る特定の職種から一人だけ職業人を選んで、他の職業人を採らないというその原理的な理由は一体何か。ということについて、それは質の保障であると彼は謂いました。詰まり、良質な職業人を篩(ふるい)にかけて選考するためであると考えるのであります。

では、何をもって良質というのか。それは、自分と他人とを包摂する判断の出来る人のことであります。詰まり、「自他を包摂する論理」であります。人間は、お互いに、見る目をもってすれば、明らかに認識できる「目に見えない紐」によって結ばれている、という自覚を持つことが大切であるとSheldonは説きました。「目に見えない紐」。日本の先人達は、これを「因縁」と呼んでいます。因縁浅からざるものがある、という言い方があるように、人間は、お互いに、見る目をもってすれば、明らかに自覚できる因縁によって結びつけられているというのであります。したがって、人間は、この世に生を享け、やがてこの世を去るその日に至るまで「目に見えない紐」によって結ばれている。自分の独自性などはない。他人と分かつべき自分などというものは存在しない。このような自覚を持つことが大切である、とSheldonは謂うのであります。例えば、人間は、１５歳に成長するまでに約１００万人の世話になっているという考え方があります。先ず、両親をはじめとして、兄弟姉妹、学校の先生、地域社会の人、農家の人、漁業の人、という具合に考えていきますと、このような沢山の人達のお陰で大人になっていくことが出来るのであります。これをSheldonは「目に見えない紐」と謂い、日本の先人達は「因縁」と謂ったのであります。

要するに、自分の行動を決める場合に、自分のことだけを考えないで、周囲の人達の幸せとの調和を考えた上で判断すること、これを【自他を包摂する論理】と謂うのであります。

Sheldonは、このようにして１９２１年のエディンバラの国際大会の決議の中で、『ロータリーの奉仕哲学を一言で言おう。それは、自分とは他人であり、他人とは自分である、と謂うことを考えることである』という趣旨のことを断言しているのであります。

これに対して、『自分は他人でなく、他人は自分でない』と考える論理，即ち、「自他を峻別する論理」があります。これは、法律学で謂う「権利者は義務者ではなく、義務者は権利者ではない」という「自他峻別の論理」であります。

しかし、Sheldonは、この峻別の論理の枠の外に、峻別出来て、峻別できない本来の世界というものがあるのではないか、『自分とは他人のことであり、他人とは自分のことである』ということを自覚すれば、それが将に、「ロータリーの奉仕哲学」を自覚したことになる、ということを謂っているのであります。

16.「ロータリー思想の理論構造」その１６

前回は、Sheldon の奉仕哲学の核にある言葉を紹介しました。それは、自分とは他人のことであり、他人とは自分のことである、ということを自覚すること、つまり「人類連帯の自覚」を彼は説いたわけであります。人間は個体としては別々だが、心を動かす次元においては、すべての人達が、見る目をもってすれば、因縁浅からざるものがある、ということを自覚できる人、この人を「良質な人」と彼は謂ったのであります。

要するに、質の保障というのは、自他を包摂する企業経営観・人生観を持った人だけをロータリー運動の担い手として期待しているということであります。

もっと平たく言えば、「お節介焼きの人」のことであります。『情けは人のためならず』という考え方で全ての物事を処理する人が良質な職業人と謂えるのであります。このような「お節介焼きの人」を一つの職種から一人だけ選ぶのであります。したがって、倫理基準の低い職種からも一人採らなければなりません。そうでなければ、その職種にロータリーの社会改良のエネルギーが行き渡らないっことになるからであります。要するに、質の保障というのは、良質な職業人をロータリー運動の中にプールすることであります。

第３に、出会いの保障があります。

どんなに良質な職業人であっても、神様ではありませんから、長所と短所があります。その長所・短所を持った「お節介焼きの人」が、ロータリーの例会に毎週１回集まって、それらの人達が、自分と同じくらい良質な考え方でお節介を焼き合います。その結果、自分の業界では得られない新しい発想を一つづつ得て、一例会終わる毎に、自分の人格が抜本的に良くなって来ます。そうするとどうなるか。ロータリアンが先見性を取得することになります。

そこで第４に、先見性の取得があります。

ロータリアンの先見性の程度が良くなります。先がよく見えるようになります。管理者というものは、先がよく見えないと企業の管理は出来ません。殊に、激動の時代には尚更であります。

先見性の取得、それから、対人関係についての考え方の内容、対人関係を尊重する程度が抜本的に良くなります。

但し、精神の改良というものは、目に見えません。しかも、時間がかかります。

Guy Gundaker の「ロータリー通解」は、この点について次のように謂います。

『ロータリアンがロータリークラブの例会に参加することを通じて得る自己研鑽の功徳。それは、一瞬一刻の尺度をもってしては計ることが出来ない。何故なら、精神の向上は、自分で自覚できることは少ない。１０年２０年とロータリー運動に参加することにより、その人の体質改善は、単なるメッキの域を脱して、本質的な自己改善となるに至るのである。』と断言しているのであります。

17.「ロータリー思想の理論構造」その１７

前回は、ロータリアンの先見性の取得に付いて、それは、ロータリアンが例会に参加することを通じて得ることの出来る自己研鑽の功徳である、と云いました。ロータリアンは皆職業人であります。すると自己研鑽の功徳は何処に及ぶのか、というと、自分が管理している会社の性格を基本的に改良していくという形で企業の改良に連なっていく、というのであります。即ち、自己改善のエネルギーは、先ず、自分が管理している職業社会に注がれます。

そうすると、自分の企業内管理、同業者との利害の調整、下請けとの対応、これらは皆、人間関係でありますから、これら人間関係の全てを自他を分かたぬ思考、詰まり人に対する思いやりをもって処理しようということになります。

そうすれば、企業内管理、同業関係、下請関係、取引関係、顧客関係等々全てをロータリーの例会で得た人間関係尊重の考え方で潤すことが出来ます。

実は、同業者の居ない一業一会員制を採ればこそ、良質な親睦により、これらのことが可能となるのであります。

このようにして、一業種一会員制をもって、会員を少数の職業人に限ればこそ、良質な親睦がプールされて、良質な親睦は、良質な人格の改善に繋がるのであります。そして、人格の改善が出来上がれば、その人の管理能力を通じて、先ず、その人が管理する企業、それからその周辺を潤すことになるのであります。

では、この人格の改善は、何処へ繋がっていくのか。と謂うと、Sheldon は、『天地の理法を認識し、もって利己と利他との調和を実現することが出来る』というのであります。しかし、天地の理法の認識とは、これは明らかに「宗教の世界」でありまして、認識することはできません。しかし、ロータリアンは、天地の理法を認識する努力をすることは出来るのであります。

では、天地の理法を認識する努力は、何時までするのか。やがてこの世を去るその日に至るまで努力せよ、と Sheldon は謂うのであります。と謂うことは、死ぬまでその認識は出来ない、ということを意味します。

したがって、『天地の理法を認識し、もって利己と利他とを調和せしめる』というのは、ロータリアンにとっては、あくまでも願望の世界であって、実現の世界ではありません。この願望が実現されるのは「聖者の世界」であります。

「聖者の世界」は、即ち「宗教の世界」でありまして、ロータリーはそこまでは望んで居ないのでありますが、聖者になることを願望しながら、毎週一回の例会で自己研鑽に励み、自己改善を図って行くのであります。したがって、このような親睦団体のことをロータリークラブと呼ぶのであります。

要するに、ロータリーは、利己と利他との調和を念願しながら、日夜努力を重ねていくという意味において実業倫理の世界にあると云えるのであります。

18.「ロータリー思想の理論構造」その１８

前回は、「利己と利他との調和」を念願しながら努力を重ねて行くという意味において、ロータリーは実業倫理の世界にある、ということを申し上げました。

しかし、利己と利他との調和というのは、具体的に言えば一体どのようなことなのか。「ロータリーの目的」は、「企業の根底に奉仕を置くべし、とする理想を追求することである」と謂います。しかし、資本主義社会では、企業の根底には儲けがあります。

では、企業の根底に奉仕をおく、というロータリーは、儲けを否定するのか、と謂いますと、否定はしないのであります。ロータリーは、企業の根底に儲けがあることを認めた上で、それでは儲けとは一体何か、と考えるわけであります。

例えば、１００円の物を仕入れて１００万円で売ったとすれば、そのような利益をロータリー的な意味での儲け、利益と呼ぶことは出来ません。それは、暴利であります。商人は、適正な利潤を超えて儲けてはならないのであります。

商人は、適正な利潤を得て幸せになるが、顧客もその商品を買い取って幸せになる、という両者の調和点が何処かになければなりません。

この関係を抽象的な表現で表すと、「利己と利他との調和」ということになるのであります。即ち、商人は儲けを受け取って幸せになり、客も商品を受け取って幸せになる、という双方のバランスをとる一点というものが必ずある筈である。

その調和を求めていくと、一つの取引を通じて、目に見える「商品と金銭の交換」だけでなく、目に見えない「満足と感謝の交換」、つまりお互いに小さな信頼関係を交換するようになるのであります。

このことによって得られる尊敬と信頼、これは、例えば、医者が患者の病気を治したことによって得られる尊敬と信頼と質的に何ら異なるものではありません。したがって、この立場から見ますと、実業家の場合と、専門職業の場合とでは、本質において何ら変わるところはないのであります。

そこで、Sheldon は謂います。『社会の信用という保護膜によって守られた企業は、自由競争の最中にあって、長期的に安定的に発展することが出来る』と。

これが、ロータリーの親睦の第一の功徳であります。企業が繁栄すれば従業員が幸せになる。下請が幸せになる。同業者が幸せになる。顧客が幸せになる。そして、地域社会が明るくなる。このような図式が「親睦イコール奉仕」という考え方の背後にあるのであります。

実は、Sheldon が、１９０８年、この「利己と利他との調和」の図式を簡単に書こうとして出来上がったのが、"He profits most who serves best" と言う言葉でありました。そして、この言葉は、１９１１年、オレゴン州ポートランドの全米ロータリークラブ連合会第２回大会において採択されたのであります。即ち、"He profits most who serves best"『奉仕に徹するものに最大の利益あり』

19.「ロータリー思想の理論構造」その１９

前回は、ロータリーの標語『奉仕に徹するものに最大の利益あり』の話を致しました。これは、ロータリーの世界で一番最初に提唱された標語でありました。

どうして、このような言葉になったのか。先ず、考えなければならないことは、【利己と利他との調和】であります。ロータリーは、これを奉仕の世界と呼びます。ロータリアンは職業人であり、資本主義経済社会に生きています。したがって、利益を追求しなければなりません。しかし、利益というものは、働いた結果の問題であります。その限りにおいては、利益のことを第一に考えてはならないのでありまして、【利己と利他との調和】を第一義と考えなければならないのであります。即ち、奉仕第一、serves best であります。奉仕第一の心をもって行動しなければなりません。利益、即ち儲けのことを第一に考えるべきではありません。しかし、【利己と利他との調和】を心がけて頑張れば、結果的としては最も儲かることになる、と Sheldon は考えたわけであります。そこで彼は、この考え方を "He profits most who serves best" と表現したのであります。

これは中国の易経の『積善の家に余慶あり』と多少似たところがありまして、【利己と利他との調和】、詰まり、人たるべき道、職業人としての社会的責任を遂行すれば、そのような職業人に損をした例はない、と Sheldon は謂うのであります。

しかし、この言葉は、色々と誤解を受けました。『奉仕を餌にして儲けを釣る』とか、色々な考え方があって、非常に方便的な表現でありますから、これはロータリーの精神を示すものとしては如何なものか、という議論が、嘗てヨーロッパ系のロータリアンにも日本のロータリアンの中にも多かったのであります。

しかし、Sheldon がこの言葉を作ったときに、彼がこのような方便的なことを考えていたのであれば、批判されても仕方ないと思います。

しかし、そのような方便的な考え方は、一切持っていなかったのであります。

Sheldon が謂うのは、『奉仕に徹するものに最大の利益あり、という標語について、利己と利他との調和、とは謂うが、このようなことは神様でなければ絶対に不可能である。何処まで行っても調和出来るものではない。もし、調和できるとすれば、それは聖者の世界であり、宗教の世界である。

ところが、ロータリーは宗教ではない。したがって、聖者にはならなくとも、聖者になることを念願しながら、日常生活を営み、自己研鑽に努力すればよい、と謂っているのであって、「利己と利他との調和」は「念願の世界」であって、「実現の世界」ではない。例会で自己研鑽に努力する、このような努力をして、企業管理をしている職業人に損をした人はいない。必ず儲かるのである。詰まり、自由競争の最中にあって自由競争の圏外に立ち、企業を長期的且つ安定的に繁栄させることが出来る。』ということことを謂っているわけであります。

20.「ロータリー思想の理論構造」その２０

前回は、Sheldonの説く、利己と利他の調和というのは実現出来るものではなく、実現出来るように自己研鑽によって念願する世界であると申しました。

ところが、これに対し、それは、単に念願に止まらず、自己研鑽によって実現を目指すものである、という考え方があります。これは将に聖者の世界であり、宗教の世界であります。この思想を表現した標語が、Benjamin Franklin Collinsの「自己犠牲の奉仕"Service,Not self"」であります。これはSheldonと対立します。

以上を要するに、Sheldonの説く思想が、ロータリーの本質論の立場から一つピックアップされて、ロータリーのロータリーたる所以は、職業社会に抜本的な功徳を与えることであり、このことを四大奉仕の分類に当てはめるますと、『ロータリーのロータリーたる所以は、職業奉仕の実践にあり』ということになるのであります。これは、ロータリーは実業倫理の世界であると説くのであります。

これに対し、Collinsを始め宗教的ロータリー思想を説く人達は、ロータリーの本質を一言で謂えば何か。それは『ロータリーのロータリーたる所以は、クラブ親睦の中にある』と説きます。

例会におけるクラブ親睦のエネルギーは、例会を離れたあとで職業社会を潤すこともあります。また、職業と関係のない地域社会を潤すこともあります。また、国際社会を潤すこともあります。したがって、職業奉仕というものは、親睦で得た奉仕の心を適用する場面の一分野でしかありません。法律的にはこれを余後効と謂います。要するに、効果の一つでしかないのであります。

このように考えますと、『ロータリーのロータリーたる所以は、ロータリー運動の本体であるクラブ親睦にある』。親睦が本体であって、他のものはその心の適用でしかないということであります。したがって、１９１３年、Dr.Allen D. Albertは、『ロータリーのロータリーたる所以は、良質な職業人の「実力の涵養且つ人格の形成」の中に宿る』と言い切ったのであります。つまり、実力の涵養且つ人格の形成、これ即ち、ロータリーの目的である、と説いたのであります。

そこで、ロータリーの真髄とは何か。ロータリアンは、既に良質な心をもっています。その心をもって例会へ出ることを通じて実力を涵養する、ということによって、ロータリアンの人格を抜本的に良くする。これがロータリー運動であると謂うのであります。

奉仕とは、世のため人のためとは謂いますが、それは所詮、自分の心のことであります。世のため人のためという具合に、目が外へ向いてはいけない、所詮は、自分の心の問題であります。したがって、「ロータリーのロータリーたる所以は、クラブ親睦にあり」。この考え方を四大奉仕の分類に当て嵌めると「ロータリーのロータリーたる所以は、クラブ奉仕にあり」ということになるのであります。

これが将にロータリー運動の中核にある考え方なのであります。

21.「ロータリー思想の理論構造」その２１

前回迄は、Collins の宗教的思想と Sheldon の実業倫理思想の対立を説きました。ところで、これらは共にロータリーの心の問題を重視する考え方でありました。詰まり、奉仕の心が育てば、その心は自ずから実践される、というのであります。

これに対し、主義主張ばかりで実践を伴わないロータリーは、世のため人のためにならない、先ず実践することが大事である、という考え方が出てきました。

その端緒となったのは、オハイオ州のロータリアン Edgar（エドガー） Allen（アレン） 通称 Daddy（ダディー）Allen でありました。彼は、身体障害者の養護学校を建てるために募金運動から始めて、様々な企画を立案、実施し、一躍この運動の頂点に立ちました。

しかし、出る杭は打たれるの譬え通り、Sheldon 始めロータリーの理論派達から物凄く批判されました。一言で云えば、「ロータリーの奉仕は、困っている人のところへ金品を届けるような即物的なものではない」というのであります。

これに対し、Edgar Allen も「これがロータリーの奉仕でなくて、何が奉仕になるのか」と反論して激論になり、１９２３年の国際大会ではロータリー分裂の危機があったのでありますが、Paul Harris が密かに和解工作をしたことによって、ロータリーも分裂は避けることが出来たのであります。

この結果、ロータリーは、伝統的な個人奉仕の原則を一部修正し、例外として団体奉仕を認めることになったのであります。これが有名な決議２３－３４号であります。そして、その４年後、ロータリーは、原理探求の世界がら実践を重視する世界へと移って行ったのであります。

このことが原因であるのかどうか、恐らくそうであろうかと推測されますが、Sheldon は１９３０年、ロータリーを去り、１９３６年、この世を去りました。

なお、決議２３－３４号に関しては、思想的に独自の潮流として、理論よりも実践を重視した指導者、弁護士の Frank（フランク） L. Mulholland（マルホランド） が現れました。

当時のロータリーの指導者達は、身体障害者養護学校設立の運動に対して、これは即物的些末な奉仕である、として募金に一切協力しなかったのであります。

Mulholland は、この苦々しい経験から、ロータリーは所詮ロマンチックなロータリアンの観念の遊びにしか過ぎない、つまり二重人格である。行動に出ない単なる理論は燃えない石炭のようなものであって何らの意味を持たない。ロータリーは原理と実践との調和の中に宿る、これが Mulholland の思想でありました。

そこで、これを外史的に見ますと、Edgar Allen と Sheldon 達との紛争の結果として、決議２３－３４号が生まれたと謂えますが、一方、これを歴史の資料によって内史的に見ますと、実は、Mulholland の理論と Sheldon ほか指導者達の理論とが真っ向から衝突した結果でありました。Paul Harris は、この時ばかりは、Mulholland に加担したのであります。したがって、Paul Harris の「ロータリー寛容論」というものは、非常に柔軟な考え方であると謂えるのであります。

22.「ロータリー思想の理論構造」その２２

前回申し述べた１９２３年のセントルイス国際大会における決議２３－３４号は、表面に現れた現象の歴史、即ち外史の視点から見れば、Edgar Allen と Sheldon 達理論派とが衝突した結果であると謂えるのでありますが、これを思想史の視点から内史的に見ますと、実は、Mulholland の提唱した理論と Sheldon 達理論派の理論が真っ向から衝突した結果であったと申しました。

そこで、Mulholland は、決議２３－３４号の第４項において、『ロータリーは、理論と実践との調和の中に宿る』と説いたのであります。したがって、決議２３－３４号の第４項は、初期ロータリアンの思考の源流を集大成した最後の問題点を示していると謂えるのであります。詰まり、Mulholland の考え方が、初期ロータリーにおける試行錯誤の最後の決着点となったのであります。

ところで、国際ロータリーの理事会は、１９２３年の決議２３－３４号によるロータリー奉仕哲学の思考の集大成の後を受けて、四年間沈思黙考するのであります。そして、今までのロータリーは、原理のロータリーであった。奉仕の心を作る親睦と奉仕の心の実践とは調和しなければならない。調和させるためには、これからは実践を中心にしてロータリーを考えて行かなければならないと考えたわけであります。即ち、原理は既に把握したるによって、これからは実践の世界に入って行こう、というのであります。

このようにして、やがて１９２７年の国際ロータリー理事会は、「奉仕の４分類法」即ち、職業奉仕、社会奉仕、国際奉仕、クラブ奉仕という実践を中心に考えるという思考を確立するに至るのであります。これが「ロータリーの目的」の根底にある所謂「四大奉仕」の考え方であります。

そこで、実践を中心に考える世界に入っていくためには、クラブの事業計画とクラブ組織を組み立てておかなければなりません。

その結果、第１に、家庭生活及び地域社会生活に対する奉仕の実践を社会奉仕。

第２に、実践の効果が外国で上がる国際社会生活に対する実践を国際奉仕。

第３に、ロータリアン自身が管理している企業及びその周辺、即ち、同業・下請・取引関係等の職業的社会生活に対する奉仕の実践を職業奉仕。

第４に、クラブの管理運営に参加するロータリアンの行動を総括して、クラブ奉仕と称したのであります。

以上を要するに、今日のロータリーがどのような運動を行おうとも、１９０５年から１９２７年までの初期ロータリーの色々な試行錯誤を正しく理解しないと、その行動の原理体系上の意味合いを理解することは出来ないのであります。この無理解の横行がロータリー運動衰退の原因となっていることは明かであります。したがって、私達は、初期ロータリーの原理確立の軌跡というものをもう一度復元して、私達の心構えを整理しておく必要があると思うのであります。

23.「ロータリー思想の理論構造」その２３

今日は、ロータリー思想の理論構造の最後の課題として、ロータリーの始祖 Paul P.Harris の思想遍歴に触れておきます。

１９０５年、ロータリー創立当初、Paul P.Harris に世のため人のための奉仕という考え方はありませんでした。Harrry（ハリー） Ruggles（ラグルス）と共にひたすら親睦の世界を行きました。しかし翌年、Donald Carter の忠告によってロータリーの社会的意義を自覚し、世のため人のためのことを考えるクラブへと方向を換えました。その先に奉仕の世界がありました。Harrry Ruggles は、真っ直ぐひたすら親睦の世界を行きました。そのため、クラブは親睦派と奉仕派に割れ、Paul P.Harris は思想的に Harrry Ruggles とは袂を分かつことになったのであります。

１９０８年、Sheldon が世のため人のための考え方を奉仕という言葉で集約して提唱したとき、Paul P.Harris は大いに共鳴して、その後は、Sheldon と同じ道を進んだのであります。

どころが、１９１７年、Edgar Allen（エドガー アレン）の身体障害者養護学校設立の運動を契機として、決議２３－３４号が採択されると、今度は、その理論的指導者 Mulholland（マルホランド）の思想にも共鳴して、Sheldon と Mulholland の双方の思想を提唱するようになったのであります。このように Paul P.Harris のロータリー思想は、非常に柔軟な思考であったと思うのであります。したがって、これは、将にロータリー寛容論と謂うべきでものでありました。

何はともあれ、２０世紀初頭のロータリーの世界には、Paul P.Harris を始め、様々な素晴らしい思想家が犇めいていたのであります。したがって、ロータリーの思想の世界は決して一枚岩ではなく、一方に "Service,Not self" という宗教倫理の世界、他方に "Service above self" という実業倫理の世界、というように、全く異なる思想が同時に併存しながら、更に、それらの思想に基づく様々な思想が、お互いに他の思想を排斥することなく、他の思想に学び合いながら滔々と流れる大河の如く今日に至っているのであり、これがロータリーの思想の潮流であります。

したがって、ロータリー１１２年の歴史を顧みるとき、どの時点を切ってみても、その横断面には、恰も満点に輝く綺羅星の如く、様々な思想の混在が見られるのであります。これがロータリー思想の特色であります。Harold Thomas（ハロルド トーマス）が、いみじくも名付けたように、将に「ロータリー・モザイク」と謂うべきものであります。したがって、ロータリーの思想を一義的に割り切ることは出来ません。いつも寛容の心を持って、自分と異なる思想の存在を認め、自分の足らざるところを謙虚に学ぶ姿勢が必要であろうかと思うのであります。Paul Harris が『ロータリーは、寛容の中に宿る』と悟ったことの一つの意味もこの点にあると思うのであります。そして、いずれの思想の世界に生きるかということは、将に全世界１２０万人のロータリアン一人々々の自由選択の問題なのであります。

『職業奉仕・この素晴らしきもの』
東京２５８０地区職業奉仕委員会講演

2017. 8. 9

深　川　純　一

今日は、「職業奉仕・この素晴らしきもの」というテーマを頂いております。ただ、職業奉仕の話と申しますものは、色々な視点から分析しなければなりません。先ず、職業奉仕の歴史の視点があります。そして思想の視点、原理の視点、実践の視点など色々な視点からの話があります。それを全てに亘ってお話しすることは、時間の関係で到底出来ません。

そこで、今日は、職業奉仕を理解するための基本的な話から入って行きたいと思うのであります。

先ず、職業奉仕を理解するために、どうしても心に留めておいいただきたいことがあります。それは一体何か。それは、ロータリーが倫理運動である、と謂うことであります。

では、倫理運動とは一体どういうことなのか。

それは、世の中に倫理を提唱していくこと、人間は本来如何にあるべきか、という倫理を守る人間、道徳を守る人間を作ることによって世の中を明るくして行こうという運動であります。

では、それは具体的に謂えば、一体どういうことなのか。

実は、ロータリークラブは、寄付団体ではありません。また、慈善団体でもボランティア団体でもありません。ロータリアンに奉仕の心を授け、倫理を提唱していく団体、即ちロータリアンの心の開発を第一義とする団体であります。ここは大事なところ。

では、そのことを具体的に謂えば、一体どういったことになるのか。

例えば、仮に、街角に紙屑が落ちていたとします。ロータリアンとしては、町を美しくするために、その紙屑を拾うだろうと思います。

では、紙屑を拾うことがロータリアンの本来あるべき姿なのか、と云うと、そうではありません。ロータリーは、紙屑を拾うところにロータリーの本願はないよ、と謂います。

では、一体どこにロータリーの本願があるのか。

ロータリーは、そもそも紙屑を捨てない人を育てるところに本願がある、と謂うのであります。人を育てること、道徳を守る人間を作ること、そのことによって世のため人のために動いて行こう、とロータリーは謂うのであります。見方を変えれば、それが将にロータリーが倫理運動である、と謂うことを意味するのであります。

この点をとらえて、『ロータリーとは、人類文化史が２０世紀の時代に刻印を打った職業人の最も優れた倫理運動である』と断言しているのであります。したがって、ロータリーが倫理運動である、ということが理解出来ないと、ロータリーの職業奉仕が判らなくなります。惹いてはロータリー

自体が判らなくなるのであります。

では、ロータリーが倫理運動である、ということが、一体どこに書いてあるのか、と申しますと、標準ロータリークラブ定款第５条『目的』の規定を見ますと、ロータリーが将に倫理運動である、ということが一目瞭然に理解出来ると思うのであります。

殊に、「目的」の第２のところは、職業倫理に関する規定であり、これは職業奉仕の中核部分なのであります。

何はともあれ、ロータリーは、倫理運動であるが故に、古来、色々な理念を提唱し、様々な原理を開発して来ました。したがって、ロータリーと謂うものは、２０世紀初頭以来、私達の先人が素晴らしい知恵を残してくれているのであります。将にロータリーは、先人達の尊い知恵の結晶なのであります。したがって、ロータリークラブに入会して、ただ漫然とロータリーライフを過ごす、ということは、先人達に対して甚だ失礼なことになる、と思うのであります。

やはり、縁あってロータリーに入った以上は、２０世紀初頭の先人達が理想に燃えて、色々な知恵を開発してくれているのでありますから、先人達に敬意を表して、その知恵に学ばなければならない、と思うのであります。

そこで先ず、知恵に学ぶ、ということについて若干の補足をしておきます。即ち、ロータリーというものは、単に知識として知っているだけでは身に付くものではありません。ロータリーの中で色々な体験を積み重ねることによって、初めてロータリーが身に付いていくものなのであります。一つの物語を紹介しておきます。

スイスの片田舎での話でありますが、お婆さんが笊（ざる）の中に羊の毛を入れて、それを綺麗な小川の流れに浸して洗っていました。そこへ神父さんが通りかかりました。『お婆さん。貴女は、毎週日曜日に教会に来て私の話を聞いているから、さぞかし、善い話を沢山覚えただろうね』と言いました。するとお婆さんは、『ところが神父さん。幾ら善い話を聞いても、すぐに忘れてしまいますから、何も覚えていませんよ。でも、私は、それでいいと思いますよ。神父さん。この笊の中を見てください。笊の中には、ドンドン水が入って来ますが、すぐ笊の外へ流れ去って行きます。しかし、そのために笊の中の羊の毛は、こんなに綺麗になっているではありませんか。私も神父さんの話を聞いては忘れ、聞いては忘れてしまいますが、それで私の心も少しは綺麗になっていると思いますよ。』というのであります。

この話は、一体何を意味するのか、と申しますと、聞いては忘れ、聞いては忘れながら、水で洗われる笊の中の羊の毛のように、自分自身が磨かれていく、心が磨かれていく、ということを意味しているのであります。

したがって、私達は、忘れることを怖れてはなりません。出来るだけ沢山の人の話を聞き、沢山の本を読み、そして、聞いては忘れ、読んでは忘れてしまうものですが、しかし、何回も何回も、聞き忘れ、読み忘れながら、次第々々に心が磨かれてロータリーが身に付いていく、奉仕の心が身に付いていくのであります。これが知恵というものであります。単なる知識ではありません。

それだからこそロータリーは、「毎週の例会には出て来いよ」というのであります。仮に、ロータリーが寄付団体であれば、何も毎週例会に出る必要はありません。寄付

団体であれば、例会は月に１回でもよろしい。２ヶ月に１回でもよろしい。極端なことを言えば、例会に出席しなくても寄付さえしておればよいのであります。

しかし、ロータリーは寄付団体ではありません。倫理団体なのであります。

したがって、クリスチャンが毎週日曜日に教会に行って、神に祈り、心を洗うのと同じように、ロータリアンも必ず毎週一回の例会には出席して、お互いに心を磨き合うのであります。これがロータリーの真髄にある考え方であります。

それは何故か、と言いますと、ロータリー運動が倫理運動だからであります。世のため人のために倫理を提唱していくためには、先ず、ロータリアン自身の心を磨かなければ、ロータリアン自身の倫理を高めなければ、世の中に倫理を提唱することはできません。したがって、ロータリーは、毎週の例会には必ず出席しなさいよ、というのであります。これが自己研鑽であります。

そして、ロータリアンは、毎週の例会に出席して、ロータリアン同士お互いに心を磨き合って奉仕の心を授かるのであります。これが切磋琢磨であります。そして、ロータリアンは、例会の外へ一歩出ますと、そこは全て奉仕の実践の場であり、ロータリアンたる者は、必ず世のため人のために行動するであろう、ということをロータリーは期待しているのであります。

このことを象徴的に表している言葉があります。それはガバナーの研修会場である国際協議会の会場、その入り口に掲げられた言葉であります。

「入りて学び、Enter to learnm」、そして、出口には、「出でて奉仕せよ。Go forth to serve.」と書かれているのであります。

このようにして、ロータリアンは、例会で卓話を聞き、異業種の良質な人達と交わることによって、企業経営上の知恵だけでなく、人生万般のことを学ぶのであります。そして、学んだことは忘れてもよろしい、その体験を積むことによって、初めてロータリーが身に付いていくのであります。将に、その人の一挙手一投足がロータリーになっていくのであります。単なる知識に止まることなく、そこに知恵が生まれてくるのであります。したがって、ロータリーの奉仕の実践、殊に職業奉仕の実践は、先ず、例会出席に始まるのであります。

ロータリーは、２１世紀の時代にも通用する思想である、と謂って大見得を切るためには、先ず、ロータリアン自身が例会に出席して、他のロータリアンの知恵に学ばなければならないのであります。それなくして、ロータリーというものを身につけることは出来なかろうと思うのであります。

初期ロータリーのバイブルと謂われるGuy Gundakerの『ロータリー通解』の中にも、「ロータリーの中で体験を積むことによって、人は、ロータリアンになる」と述べられています。では、ロータリーの中のどこで体験を積むのか。謂わずと知れた最も大事な場所が毎週一回の例会なのであります。

このように、ロータリーの中で色々な体験を積むことによって、ロータリー的な考え方が身に付き、初めてその人はロータリアンになることが出来る、というのであります。このように、Guy Gundakerは、ロータリアンとロータリークラブの会員とを区別しているのであります。厳しい言葉であります。

昔、神戸クラブの直木太一郎パストガバ

ナーは、『Rotarian face（ロータリアンの顔）』ということを謂っておられました。それは一体どういうことか。

ロータリーに入会して２～３年経つと、ロータリー的な考え方が身に付き、如何にもロータリアンらしい態度･行動になって、ロータリアンらしい顔付きになってくるというのであります。

そこで、ロータリー的な考え方を身につけるための基本的な話をいたします。

その基本的な話として、一番重要なのが一業一会員制の原則と規則的例会出席の原則であります。実は、これがロータリーという組織の原点であります。

そこで、先ず一業一会員制の原則とは何か。これは、クラブの会員は一つの職種から一人だけ良質な人を選ぼうというものであり、これを提案したのは始祖 Paul P.Harris でありました。

では、何故、このような原則を決めたのか。資本主義経済社会は自由競争社会でありますから、同業者は、競争相手がいるために、お互いに心を開いて仲良くなることが出来ません。

そこで、Paul P.Harris は、クラブの親睦を守るためには同業者を排除して、一つの職種から一人だけ会員を選ぶという一業一会員制の原則を採ったのであります。したがって、これは、クラブの親睦を守るために Paul P.Harris 自身が決めた原則であり、これがロータリーという組織の原点なのであります。

そして、その１ヶ月後の３月２３日の創立総会に当たる会合において、規則的例会出席の原則を決めました。これは、４回連続して例会を欠席したる者は自動的に会員資格を失うというのであります。しかも、当時のクラブ例会は、２週間に一回でありましたから、４回連続して欠席すると２ヶ月もクラブに出てこないことになります。したがって、そんなに長い間欠席して、お互いの安否も気遣わない、助け合いもしない、そんな冷たい奴は俺たちの仲間じゃない、辞めて貰おう、というのがこの原則を決めた彼らの心だったのであります。この原則もクラブ親睦を守るために採択した組織の基本原則でありました。

要するに、彼らはまず、「一業一会員制の原則」と「規則的例会出席の原則」を採択し、ロータリーの最も基本的な組織原理を確立したのであります。これがロータリーの組織の原点であります。したがって、ロータリーは、原理としてはこれに反するものを認めないのであります。

近年、規定審議会において、一業一会員制の原則が廃止されたり、規則的例会出席の原則が有名無実になっていますが、これらは目に見える現象の世界の問題でありまして、ロータリーは本来如何にあるべきか、という本質の世界では、ロータリーは一業多会員制や、例会の欠席を絶対に認めないのであります。これは大事なところであります。

何はともあれ、このようにしてロータリーは、親睦が確保され、会員達は、皆仲良くなって行ったのであります。

ところで、彼らは皆職業人でありますから、それぞれ自分の企業経営上の悩みをもっています。その悩みをクラブに持ち寄って、皆で智慧を出し合って解決するようになりました。一業一会員制でありますから会員は皆業界が違います。したがって、発想もアイディアも皆違いますから、お互いに智慧を出し合って解決したのであります。したがって、クラブが恰も経営相談所

のような機能を営むようになり、会員達は次第に豊かになって行ったのであります。

このクラブ例会における発想の交換の機能こそ、ロータリークラブが創立当初からもっていた本質的な機能でありまして、この機能が、後に至って職業奉仕実践の基本前提となるのであります。

そして約１年経った１９０６年の４月、Donald Carter という弁理士にクラブへの入会を勧誘しました。すると彼は、クラブの助け合い運動の説明を聞いて、『自分達だけが助け合って豊かになるというような利己主義の団体は永続性がないだろう。私は、二度とない人生を、そのようなエゴイズムの世界におくことは出来ない』と言ってきっぱりと入会を断ったのであります。

これを聞いて、痛く反省したのが Paul P.Harris でありました。『Carter の言うとおりだ。クラブの行き方を変えよう。』

そこで、自分達の親睦のエネルギーを世のため人のために使おう、と考えるようになったのであります。

実は、この Donald Carter の忠告から出てくる Paul P.Harris の反省から、ロータリーにおける奉仕という考え方が生まれて来るのでありまして、これがロータリーにおける「倫理性の芽生え」でありました。

と同時に、それは、ロータリー拡大の系譜の始まりでもあったのであります。何故なら、世のため人のためのクラブであれば、それは全米の諸都市にあって然るべきだという考え方が出てくるからであります。

要するに、１９０６年以前のロータリーは、親睦だけの世界でありました。

しかし、実は、この親睦の世界の中に既に奉仕という考え方の萌芽があったのであります。このことは、当時、Paul P.Harris は意識していなかったのでありますが、彼が提案した「親睦のための一業一会員制の原則」が、Arthur Frederic Sheldon によって、「奉仕のための一業一会員制の原則」に転化して行くのであります。

では、「奉仕のための一業一会員制の原則」とは一体何か。

それは、地域社会に存在する全ての職種の横断面を捉えて、一つの職種から一人だけ良質な人を選んで入会させます。そして、その人をロータリーがその業界に差し向けた大使・アンバサダーだと考えるのであります。このようにして、全ての職種に一人ずつ良質なロータリアンが入会することによって、地域社会が倫理的なものに改善されて行くであろうという考え方なのであります。

このようにして、ロータリーという組織の原点が確立し、それ以降２２年間、約四半世紀の間にロータリーは見事な原理体系を築き上げたのであります。

そこで今、１９２７年までの初期ロータリーの原理・原則の開発の流れを振り返りますと、今申し上げましたとおり、１９０５年２月２３日、ポール・ハリスは、最初の会合で「一業一会員制の原則」を採択し、次いで３月２３日、シカゴクラブの創立総会において「規則的例会出席の原則」を採択しました。これらは何れもクラブ親睦のための基本原則でありますから、この時点では親睦だけのロータリーでありました。

ところが１９０６年春、Donald Carter の忠告によって、親睦だけのロータリーに世のため人のための考え方が入ってきました。これがロータリーにおける奉仕という考え方の萌芽・芽生えでありました。そして、１９０７年、Arthur Frederic Sheldon によってロータリーにおける奉仕

概念が開発され、親睦だけのロータリーに世のため人のための奉仕という考え方が入ってきたのであります。

ところで、ロータリーのこの原理開発の過程を分析しますと、原理体系の核となる三つの柱を見取ることが出来るのであります。

即ち、第１の柱は、ロータリアンの個人倫理の確立の場面であり、ロータリー運動の中核をなす部分であります。即ち、１９１５年のサンフランシスコの国際大会において、【全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓】所謂【ロータリー道徳律】を採択し、ロータリアンの個人倫理を確立しました。これは、ロータリーの奉仕をロータリアンの個人倫理の問題として集大成したものであり、まさにロータリーの倫理運動としてのハイライトでありました。

第２の柱は、ロータリーを運動体として構成する定款細則論の場面即ち、ロータリーの組織原理確立の場面であります。即ち、優秀なロータリー思想を慕って、沢山の人達が集まって来ましても、そのままでは、烏合の衆にすぎません。これを合理的に管理する原則が必要なのであります。そこで、ロータリーは１９２２年、ロサンゼルスの国際大会の決議により「国際ロータリーの定款・細則」及び「標準クラブ定款」を採択し、ロータリーの組織原理を確立したのであります。これは、ロータリーの組織を運動体の側面から集大成したものであります。

ところが、以上によってロータリーの本質は解ったのでありますが、実は、その当時のロータリーが原理形成の過程の中で最後に一つだけ残した課題は、実践の問題をどのように処理するかということでありました。

そこで、第３の柱として、１９２３年、ロータリーはセントルイスの国際大会の決議により『決議２３－３４号』を採択し、実践原理を確立したのであります。これは、実践の視点からするロータリー思想の集大成でありました。

このようにして、ロータリーは、原理のロータリーから実践のロータリーへと一歩を踏み出したのであり、ロータリーの奉仕の哲学上残されていた最後の課題は実践の問題であったのであります。

このことについてPaul P.Harrisは、１９３４年の著書【This Rotarian Age】の中で『我々は、言うべきことは全て言い尽くした。しかし、為すべきことは未だ何一つ為されていない。これからは実践のロータリーに邁進しよう』と言っているのであります。

ただ、このようにして原理の体系は確立したのではありますが、この確立された原理を具体的にどのように実践するべきか、については未だ何も決まっていなかったのであります。そこで ロータリーは４年間、沈思黙考しました。その結果、１９２７年に至って国際ロータリー理事会によって、四大奉仕の概念を開発するに至るのであります。

このようにして、初期ロータリーは、創立以来、僅か２２年間、即ち四半世紀の間に素晴らしい原理の体系を確立し、それ以降、四大奉仕の実践活動によって素晴らしいロータリーを創り上げたのであります。

そして、この素晴らしいロータリーは、１９２０年即ち大正９年、日本に拡大の第一歩を踏み入れることになりました。それが東京ロータリークラブの創立でありました。そして、それ以後日本のロータリーも順調に拡大発展を遂げまして、戦前、戦中、

戦後の日本のロータリーは、原理的にも、実践的にも、誠に倫理的な素晴らしい活動を展開したのであります。

さて、日本のロータリアンの象徴的存在は、東京クラブの米山梅吉先生であります。米山先生は『ロータリーの例会は人生の道場である』と断言しました。ロータリーの例会は、ロータリアン一人々々の自己研鑽の場であり、また、ロータリアン相互の切磋琢磨の場であると謂うのであります。

殊に、職業人であるロータリアンが職業奉仕を実践するためには、先ず毎週の例会に出席しなければならないのであります。詰まり、ロータリアンの職業奉仕は、例会出席が大前提なのであります。職業奉仕を実践するためには、先ず毎週の例会に出席しなければならないのであります。

そして、例会において聞き得た企業経営上の色々の知恵、謂わばノウ・ハウを自分の企業に適用します。

そして、それによって自分の企業が成功したならば、その成功したノウ・ハウを同業組合や商工会議所を通じて、職業社会に披露するのであります。これが世のため人のための職業奉仕の実践になるのであります。

ここで謂う所のノウ・ハウとは、産業秘密的なものではありません。成功することが完全に証明されたノウ・ハウのことなのであります。そのようなノウ・ハウを、同業者のために公開し、更に、自由競争に破れていった敗者のために公開することなのであります。この具体的な事例は後で紹介します。

それから更に、ロータリアンは、例会においては、企業経営上の知恵の交換によって、職業人として為すべきこと、為すべからざること、詰まり職業の倫理を誓い合い、その職業倫理を高めなければなりません。そして、その高められた職業倫理を実践するわけであります。これがロータリーの職業奉仕の実践であります。したがって、先ず例会に出席することが職業奉仕の出発点なのであります。

ところで、このような例会出席の重要性を、今日の日本のロータリアンは、どれ程理解し、実践しているでしょうか。疑問なしとしません。

多くのロータリアンは、例会では、ただ単に食事をとり、報告を聞き、卓話を聞いて帰って行きます。企業経営上の知恵の交換などは殆どないようであり、自己研鑽・切磋琢磨の意識もないようであります。大都会のクラブでは、卓話も聞かずに食事だけして帰って行く人も沢山居ますが、これはもう論外であります。このような人は、そもそもロータリークラブに入会すべきではなかったのであります。

翻って、２０世紀初頭のロータリアン達は、一体、どのようであったのか。彼らは、例会の重要性を強く認識して、自己研鑽・切磋琢磨による企業経営上の知恵の交換をしていました。

そして、その例会活動の中からロータリー的企業管理論とでもいうべき原理を開発し、その原理を実践して、１９２７年、遂にその原理の実践を職業奉仕と名付けたのであります。

したがって、私達後輩ロータリアンは、謙虚に先人の知恵に学び、例会出席の重要性を肝に銘じなければならないと思うのであります。

実は、この先人達の職業奉仕を中核とする精神伝統は、戦前の日本のロータリーの先輩達に見事に受け継がれていたのであり

ます。それは、戦前、戦中、戦後の日本のロータリアンが、将に命がけでロータリー運動を守り切ったという物語であります。これは、大袈裟な話でも何でもない、厳然たる事実なのであります。

先ず、日本のロータリークラブは、大正９年１０月２０日、ダラスロータリークラブをスポンサークラブとして東京ロータリークラブが創立されました。これが日本における第一の本家クラブであります。

次いで、大正１１年１１月１７日、今度はＲＩの直轄によって大阪ロータリークラブが創立されました。これが日本の第二の本家クラブであります。

この東京クラブと大阪クラブという二つの本家クラブを基点として、日本ロータリーの拡大が始まったのであります。即ち、第１分家クラブは神戸ロータリークラブ。次いで名古屋、京都、横浜と順次設立され、当時の日本の六大都市には、悉くロータリークラブが設立されたわけであります。

この後は日本外地での拡大となります。即ち、昭和３年からは、朝鮮の京城、満州の大連、奉天、ハルピン、台湾の台北の各クラブが設立されています。

そして、昭和９年、三代目村田省蔵ガバナーがロータリー拡大のスローガンを掲げて、一挙に１４クラブが誕生したのであります。これが日本の初期ロータリー拡大の系譜であります。

このようにして、戦前の日本ロータリーは、思想的にも、理論的にも、そして実践的にも真に素晴らしいものを創り上げて来たのであります。

ところが、昭和初期から始まったロータリーに対する軍閥の弾圧によって、日本のロータリーが右往左往しながら、挙げ句の果てが壊滅状態に追い込まれて、遂に解散してしまったのであります。時に、昭和１５年９月１１日のことでありました。

このような種類の国家社会の動きというものは、一つの潮流として起こって来ますと、最初は処女の如く、遂には脱兎の如く、日本のロータリーを押し潰すに至ったのであります。

ところで、ロータリーが壊滅するについては、もともとロータリーの側に多少の原因があったのか、と云いますと、それは無きにしも非ず、でありました。

第１に、戦前のロータリーは、超一流の実業家によって独占されていました。したがって、庶民の中に足を据えられない社会運動というものは、何か事が起こるとバイタリティがないのであります。元来、ロータリーは、庶民の中から出発したものでありますから、日本のロータリーも庶民化されるべきものであったのであります。

第２に、当時は日本の政治権力が軍閥に握られ、軍閥は、アメリカの国際政策と対立する構えを見せ、何れはアメリカと戦争をするべく準備作業を組んでいた時代でありました。

このような、日米感情が悪化するムードの中で、本部がアメリカにあって、名前がRotary International。即ち、１８５０年のパリ宣言で『万国の労働者よ団結せよ』と叫んだ時の名前がInternationalでありました。

そこで、ロータリーは赤だ、とか、国際的秘密結社フリーメイスンの隠れ蓑であってアメリカに情報を売るスパイだ、とかいう理論が成り立つようになったのであります。

勿論、ロータリーは、これに対して色々と反論しましたが、事柄は、元来、感情問

題でありますから、事態は益々厳しくなり、結局、衆寡敵せず、敗北してしまったのであります。

ところで、ロータリークラブ解散の口火を切ったのは、静岡クラブでありました。昭和１５年８月８日、何らの討議をすることなく真っ先に解散しました。これが切っ掛けになって、大阪、岡山、京都と順次各クラブが解散して行ったのであります。

東京クラブでは、米山梅吉先生が軍当局に呼び出され、ロータリーの組織は大日本帝国に対する反逆であるとまで極言されたのであります。

このようにして、日本全国のクラブが次々に解散し、最後に９月１１日、東京クラブの壇上に米山先生が立たれました。

『重い足を引きずって私は今ここに立つ。こんなつらい気持で皆さんに話さねばならないのは、２０年来初めてである。私はただ、かかる結末になったことをお詫びしたい。

日本国中のロータリークラブが一致団結しているならば兎も角、このように散り散りになっては、最早手の施しようがない。ここはひとまず解散して時の来るのを待とう。

創立以来の２０年を顧みるとき、誠に感慨無量である。この間、ロータークラブが如何に国家社会に貢献して来たか、その歴史は燦として輝いている。私の眼底には、絵巻物のようにそれらが彷彿としてくる。私はただ、皆様に御礼を申し上げ、自分の不行き届きをお詫びしたい。』と。

これが日本のロータリーが軍閥の弾圧によって壊滅した最後の姿でありました。

では、それで日本のロータリーがなくなったのかと謂いますと、ロータリークラブという組織は壊滅しましたが、ロータリー運動はなくならなかったのであります。それは一体何故か。

解散当時、日本国内には、ロータリアン数２，１４２名、クラブ数４８クラブがありました。本州に３７クラブ、朝鮮・満州にそれぞれ４クラブ、台湾に３クラブ、合計４８クラブであります（因みに、今日の日本の状況は、２０１７年４月末現在、日本全国にクラブ数２２６３、会員数８９，３８５名。）

今日のロータリーから見ますと、将に一地区の会員数にも満たない、真にささやかな組織でありました。しかし、ロータリーの真髄を会得した粒よりのロータリアンの集団でありました。したがって、殆どのロータリアンは、ロータリークラブが解散してもロータリー運動は止めなかったのであります。

ところで、ロータリークラブは、解散しましたので、ロータリークラブという名前は使うことが出来なくなりました。そこでどうしたか。

神戸ロータリークラブは、例会日が木曜日でありましたから、神戸木曜会と名前を変えました。大阪は大阪金曜会、御当地東京は東京水曜会と名前を変えて例会活動を続けたのであります。ちょっと変わったところでは、横浜同人会、名古屋同心会、福岡は、清く和すると書いて福岡清和会、札幌は、札幌職能協会、これは職業奉仕をもじったものであります。

神戸クラブは、９月５日に解散し、その１週間後の９月１２日には神戸木曜会と名前を変えて早くも例会を始めました。名前を変えれば例会活動をしてもよいではないか、と考える人が居るかも知れませんが、何故解散させられたのか、ということを考えると、これは大変危険なことでありました。

それは、一体何故か。当時の軍閥は、ロータリーはアメリカのスパイの手先である、と決めつけていたのでありますから、一旦解散しておきながら、また、同じところで同じメンバーが例会を開いている、これは一つ間違えると、思想犯として憲兵隊に検挙されて拷問される虞がありましたから、大変危険なことでありました。

やがて、神戸は戦災で丸焼けとなり、例会場のオリエンタルホテルも壊滅しました。しかし、例会は止めなかったのであります。或るビルの地下室に例会場を移しました。そして、戦災で停電のため、昼でも蝋燭が揺らめいているような廊下を通って、勿論、食堂はありませんから弁当持参で例会を続けたと云われています。

このようにして神戸クラブは、戦後、昭和２４年に国際ロータリーに復帰するまで、一回も例会を休んだことはなかったのであります。東京クラブその他のクラブも同じでありました。詰まり、軍閥の弾圧を受けながら、投獄されるかも知れないという身の危険を冒してまで、あたかも「隠れキリシタン」のようにして、ロータリー運動を続けて行ったのであります。そして、戦後、昭和２４年、国際ロータリーに復帰するまで職業奉仕を中核とするロータリーの真髄を守り切ったのであります。

一体、何が彼等をそこまで燃え上がらせたのか。

それは、例会出席を中心とするクラブ親睦の良質性、その良質な親睦のエネルギーから生まれた職業奉仕を中核とするロータリー思想の高潔性、その思想にぞっこん惚れ込んでいたためにロータリー運動をやめることが出来なかったのであります。将にこれは、命がけでロータリーの真髄を守りきった、というべきであります。

もし、現在のロータリーがこのような弾圧を受けたとすれば、果たして何人のロータリアンが弾圧に耐えて、命がけでロータリー運動を守り切ることが出来るでしょうか、答えは、明らかに否定的であろうかと思います。したがって、私達は、この先輩達の献身的な努力を肝に銘ずべきであると思うのであります。

実は、国際ロータリーは、昭和２０年即ち１９４５年頃から、原理認識の衰退が始まるのでありますが、日本のロータリーは、昭和３５年即ち１９６０年頃まで、良質な種を持続することが出来たのであります。これは、【隠れキリシタン時代】のロータリアンのエネルギーが、戦後も力を貯めていたお陰であります。

このことについて、戦後、或る人が戦前のロータリーと、戦後のロータリーを比較して、戦前のロータリーを金平糖のロータリー、戦後のロータリーを角砂糖のロータリーと評したことがあります。

金平糖は、形はまちまちで不揃いだが、硬くてしっかりしていて咬んでも簡単には崩れませんが、角砂糖は、形は整然として美しいが、柔らかくて、紅茶に入れるとすぐ溶けてしまうと言うのであります。戦前のロータリーは、まさに金平糖のような粒よりのロータリアンの集団であったと謂えるのであります。

ところで、【隠れキリシタン時代】のロータリー運動が、戦後どのような問題に反映するのか、と言いますと、昭和２４年に３代目事務総長のジョージ・ミーンズが日本ロータリーの復帰作業をしたときに、この【隠れキリシタン時代】の実体を調べましたところ、ロータリーという名称は変わっ

ていても、その実体は、ロータリー運動と全く同じでありましたので、ロータリーは存続したものと認定をして、東京水曜会、大阪金曜会等に参加していた期間を、ロータリーの出席と認定して例会出席の算定基礎に入れたわけであります。

このことは一体何を意味するのか、と言いますと、日本のロータリー史は、大正９年１０月２０日から今日に至るまで一貫性をもっているという論証になるということであります。形式論理からすると、ロータリークラブは、チャーターが出てから解散決議をするまで存在したことになりますから、日本のロータリーには、三つの歴史が存在することになります。

第１は、大正９年１０月２０日から昭和１５年９月１１日解散までの歴史。

第２は、昭和１５年９月１１日から昭和２４年の復帰が認められるまでの歴史。

第３は、昭和２４年の復帰から今日までの歴史。であります。

このような三つのロータリー日本史を考えなければならないのでありますが、このうちの第２の【隠れキリシタン時代】の活動期間を実質的に見てロータリー運動が残っていたと認定しましたので、ロータリー日本史は、大正９年から今日に至るまで一貫した一つの歴史をもっていると考えればよいのであります。

俳句の世界の長老高浜虚子の句に、

去年今年貫く棒の如きもの　　虚子

という俳句があります。月日の流れは、過去から現在、そして未来へかけて貫かれた一本の棒のようなものである、という感懐を詠んだものであります。

そこで、ロータリー日本史を時代区分してみますと、戦前のロータリーは、思想を中心にロータリーを理解しようとした時代であり、戦後のロータリーは、定款細則を中心にロータリーを考えた時代であると謂えるのであります。

実は、この戦前、戦中、戦後のロータリーには後日談があります。それは、今から２２年前の阪神淡路大震災の時、兵庫県の芦屋川ロータリークラブも壊滅しました。大震災の２日後、クラブの元会長の福本真一さんから電話がありました。『先生、クラブの例会場も事務局も会員の住居も事業所も全滅しました。しかし、例会を開いてはいけないでしょうか。道端でも何処でもいいから、とにかく皆で集まって、励まし合いたいのです』と言うのであります。私は、『それこそ本当のロータリーの親睦だ。是非おやりなさい』といって電話を切りました。後で報告を聞いたところ、震災直後の例会には１３名集まりました。例会場は適当なところを探したようであります。その次の例会は２１名、３回目は２３名集まったそうであります。

結局、芦屋川クラブは、震災で例会場も事務局も会員の住居も全て潰れましたが、例会は一回も休んでいなかったのであります。これは、将に金平糖のロータリーと謂うべきであります。

また、元ＲＩ理事の今井鎮雄先生の所属している神戸西ロータリークラブは、テリトリーが大震災で全壊した神戸市の長田区であります。したがって、殆どの会員の住居も、事業所も壊滅しました。例会場のホテルオークラも使用不能になりました。

そこで、例会場がないので会員達は、村野工業高校という高等学校に集まりました。４０名集まったそうであります。その高校には大震災で亡くなった６７０名の遺

体が安置され、８２０名の被災者が詰め掛けていたのでありますが、会員達は、その中で例会を開いたのであります。

私は、この話を聞いて、戦前、戦中、戦後の日本のロータリーの精神伝統というものが脈々と受け継がれているということを実感したのであります。

このように、ロータリアン達が戦時中の戦災や大震災によって例会場も、事務局も、住居も事業所も、何もかも失って無一物になった時に、彼らが縋ろうとしたもの、それが実はロータリーであった、ということは大変感動的な物語であります。余程ロータリーに魅力がなければ、そして強靱な精神伝統がなければ、このような事は起こらないと思うのであります。この話は、将に、ロータリーの真髄を会得したものと謂うべきであります。

最近のロータリーは衰退しているとか、堕落しているとか、とかくの意見がありますが、私は、戦災や大震災のような異常事態になったときにこそ、ロータリーの真価が判ると思うのであります。その意味で、私は、これらの体験を聞き、大変心強くも思いましたし、嬉しくも思った次第であります。これは、職業奉仕を中核とするロータリー運動にとって、忘れてはならない物語だと思うのであります。

イギリスでは「ロータリーは人間の魂の在り方の問題である」と言われています。この戦前、戦中、戦後の先輩ロータリアン達の話や、阪神淡路大震災の話を聞くと、「ロータリーは人間の魂の在り方の問題である」という言葉に、心底納得する事が出来ると思うのであります。

ところで、戦後のロータリーは、ＲＩへの復帰以後、一途拡大の道を歩むことになるのであります。

しかし、ロータリーは、１９６０年、つまり昭和３５年までは戦中、戦後の隠れキリシタンの時代の良質なエネルギーが持続していましたので、未だ良質なものを保ち得たのでありますが、それ以後は、ロータリーの拡大と相俟って衰退の度を早め、今日、御覧の通りのロータリーと相成った次第であります。

一体、ロータリーの拡大と衰退との間に因果関係があるのか、と言えば、答えは、明らかにイエスであります。したがって、この衰退を食い止めるには、『今しばし拡大を止めて、今居るロータリアンの原石を磨く時ではないか』という直木太一郎さんの警告を忘れてはならないと思うのであります。この言葉は、誠に古くて新しい言葉であり、今なお金言であります。

なお、老婆心までに申し添えますならば、原石とは、磨けば珠の如く輝く石のことであります。先ず、そのような石を集めることであります。そして、立派な人を育てること、ロータリーは人に始まって人に終わるのであります。

ロータリーは、２１世紀の思想だと謂われて来たのであります。私達は、いち早く２１世紀のロータリーを立て直す義務があると思うのであります。

ところで、２１世紀の冒頭、２００１年の規定審議会は、Paul Harris が決めた一業一会員制の原則を廃止して、一業種多会員制を採択しました。そのことが現代社会に及ぼす影響を心配する人もあるようであります。

しかし、一業多会員制になったからといって、一業種から二名以上の会員を採らなければならないということにはなりませ

ん。一名しか会員を採らなくてもよいのであります。したがって、一業一会員制のクラブを作ることも出来ます。

そして、時代の変遷によって、昔懐かしいキセルの羅宇をすげ替える羅宇屋という職業がなくなり、新たにＩＴ関連の職業が沢山出て来たように、ロータリーの職業分類も日々に新たに、日にまた新たに増え続け、変遷しています。

そこで、第一に、地域社会に存在する全ての職種から会員を採ることは困難ではないか、第二に、会員構成の現状は、地域社会を超えた会員で構成されているため、一業一会員制の原則は機能しないのではないか、と心配する人達も居るようであります。そこで、先ず、第一の問題、全ての職種から会員を採ることが困難なことは、昔も今も同じであります。例えば、初期のシカゴクラブでも、地域社会の職業分類は５００を超えていたと思われます。そこから一人ずつロータリアンを採れば、５００人のクラブが出来上がります。こんなことは、初期のシカゴクラブでは出来る筈がありません。したがって、一業一会員制の原則というのは、クラブが任意に選んだ職種から一人だけ良質な人を会員に採るということであります。

全ての職種から必ず一人採るというものではありません。ここで大事なことは、一人を採る時、一番良質な人を一人だけ採る、一番良質な人を採ると謂うことであります。これが一業一会員制の原則の中核にある考え方であります。

そこで、新しくクラブを作っていくロータリーの拡大には、二つの方法があります。一つは、大テリトリー主義であります。先ず、アメリカは広い土地を持っていますから、例えば幌馬車で一往復できる範囲の土地を、一つのテリトリーとするという考え方であります。このような広大な土地を一つのテリトリーとし、そこに一ロータリークラブを作るのであります。これがアメリカ方式の大テリトリー主義であります。したがって、会員５００名以上のクラブもあります。但し、アメリカでも地方の小都市では、小テリトリー主義のクラブがあります。

では、ヨーロッパは、如何に。ここは主にキリスト教国家でありますから、宗教の中心である教会を基準にテリトリーを設定するという考え方であります。詰まり、教会は、概ね、町の一番高いところに建てられています。したがって、教会の鐘の音が聞こえる範囲を、テリトリーとするという考え方であります。

この考え方を基本にしているのがロンドン方式の小テリトリー主義であります。会員１５０名位のロンドンクラブを中心にして、会員約３０名位の子クラブを沢山作るという方法であります。日本もこの方法であります。日本全国を一つのテリトリーとし、そこに先ず東京ロータリークラブを作しました。そして順次クラブを作っていきましたので、戦前は、朝鮮、満州、台湾を含む広大な地域が一テリトリーとなり、これがＲＩ第７０地区と呼ばれていたのであります。

このようにして、テリトリーを基準にしてロータリークラブが創られていったのでありますが、ここで大事なことは、当時のロータリークラブは、全て一業一会員制の原則が厳格に守られていたということであります。それなるが故に、クラブは良質な親睦が守られ、職業奉仕を中核とする奉仕の実践が行われたのであります。

次に、第二の問題、地域社会を超えた会員で構成されているため、一業一会員制の原則は機能しないのではないか、という問題については、クラブと云うものは、先ず、クラブのテリトリーが決められ、その上に成り立っていることを忘れてはなりません。それは一体どういうことか、と謂いますと、テリトリーというのは、平たく謂えば縄張りのことでありますから、一つのクラブが出来ますと、そのテリトリーの中に他のクラブを作ることは出来ません。これがテリトリーの基本原理であります。したがって、例えば、親クラブが子クラブを作る時は、親クラブのテリトリーを割譲して、そこに子クラブを作ります。したがって、その分だけ親クラブのテリトリーが小さくなります。これを繰り返した結果、或る親クラブは、テリトリーが駅の周辺だけになってしまったこともあります。

そこで、考えられたのが、親クラブのテリトリーを子クラブが共有するという考え方であります。詰まり、親クラブのテリトリーに重ねて二重に子クラブを一業一会員制の原則によって作るのであります。このようにして、二階建て、三階建て、四階建てという具合にクラブが積み重なって高層化していく方法であります。これをロータリーのマンション化と謂います。現在、既にこの方法を採っているクラブは沢山あります。例えば伊丹クラブは三階建てであります。人口と土地のバランスが崩れている大都会におけるロータリーの拡大は、今後はこの方法が適切であると思うのであります。

次に、一業多会員制であっても地域社会への倫理改善運動は達成可能ではないか、と考える人もあります。確かに、地域社会には、立派な人も沢山居られますから、倫理改善運動は達成可能ではあります。しかし、一業一会員制の場合は、一つの職種から一番良質な人を一人だけ入会させるのでありますが、一業多会員制の場合は、同業者が沢山入会する可能性がありますから、一人でも倫理的でない人が入会すると、悪貨が良貨を駆逐するの譬えのように、良質な人達がクラブに嫌気がさして退会していくのであります。その結果、クラブが消滅してしまった例も沢山あります。今、日本全国にこのような現象が蔓延しているのであります。将に由々しき事態であります。だからこそ、一業一会員制の理想を追求しなければならないのであります。

また、規則的例会出席の原則を厳守する場合、会員となれる職種が限定されるのはないか。緊急性を要するような職種や、自分の時間をコントロールしにくい職種は難しくなるのではないか，と考える人もいるようであります。

先ず、自分の時間をコントロールし難い職種が具体的にどのような職種なのか解りませんが、元来、自分の時間をコントロールできない人は、ロータリーに入るべきではありません。ロータリー運動は、そのような人を運動体の一員として期待していないのであります。自分の時間を自由にコントロールできる人をロータリアンというのであります。

また、緊急性を要する職種についても、警察官や消防士のような職種は、本来、ロータリー運動に馴染まないものであります。しかし、医者のように時には緊急性を要する仕事をしても、普段は治療行為に専念できる職種もあります。

また、現役を引退した会員は、同業他社への影響力を行使しうるか、と考える人も

あります。ただ、この場合、影響力という言葉が一体何を意味するのか、よく解らないのでありますが、もし、例えば、業界のドンといわれる人の影響力の意味であれば、断固として排除しなければならない，と考えるのがロータリーであります。そうではなくて、引退した会員が人格的に非常に立派な人であって、引退後も業界でリーダーシップを発揮している場合は、将に影響力を行使している、というべきであります。

また、ロータリーの魅力、または基本的なルールは、時代と共に変遷するのではないか、と考える人もいます。

ロータリーの魅力とは、ロータリーの本質にある魅力、ロータリー自体に備わっている本体的魅力のことであります。それは万古不易な魅力なものでありますから時代と共に変遷するものではありません。

また、基本的なルールが時代と共に変わることは絶対にありません。時代と共に変わるものなれば、基本的とは謂わないのであります。基本的という言葉が何を意味するかを考えるべきであります。

さて、次に、職業奉仕の基本原理の話に入っていきたいと思うのであります。　先ず、職業奉仕という言葉は、ロータリーの専門用語であります。一般世間の人達は、このような言葉は使っていません。考えてみれば、職業奉仕とは真に奇妙な言葉であります。何故ならば、職業というものは、私達が生きて行くための所得を得るための手段、詰まり金儲けのためのものであって、これは自分のためのものであります。

一方、職業奉仕の奉仕というものは、世のため人のためのもの、即ち、人のためのものであります。このように、エネルギーの方向が、全く正反対の二つの言葉を一つにして職業奉仕と謂っているのでありますから、一寸判り難い言葉であります。

一体、自分のためのものである職業が、人のためのものである奉仕のテーマになり得るのでしょうか。

職業を営むこと、即ち、金を儲けることが、何故、世のため人のための奉仕となるのでしょうか。

職業、即ち金儲け、これを奉仕と考えるためには、一体、如何なる考え方が必要なのでしょうか。この一点が判らないと、職業奉仕は永久に判らないことになるのであります。これを論証していくのが、将に、今日の課題であろうかと思うのであります。　先ず、世のため人のための『奉仕』について、最も素朴な考え方から検討してみますと、職業は所得獲得の手段、即ち、金儲けのためのものであります。それは、あくまでも自分のためのものであって、そこには世のため人のためという、人のための考え方は、一切入る余地はありません。したがって、職業は、奉仕になりません。職業と奉仕とは、それぞれ別の世界に存在する、と考えることになります。

この考え方からすれば、職業を営むことが同時に奉仕になる、とは考えないのでありますから、世のため人のために奉仕するためには、職業以外の方法によらざるを得ません。

例えば、職業によって得た所得の一部を恵まれない人達に与えるとか、自分の労力や時間の一部を割いて、ボランティア活動をするとかして、謂わば弱者救済をもって奉仕と考えるわけであります。したがって、職業をもって奉仕とは考えることは出来ないのであります。

勿論、弱者救済については、ロータリーも

社会奉仕の分野において、これを重視し実践しているのでありますが、この素朴な考え方では、職業という視点から奉仕ということを考えることが出来ないのであります。

要するに、所得獲得のために、金儲けのために行動する時の心と、世のため人のために奉仕する時の心とは、全く次元を異にしているわけであります。

実は、ロータリークラブ以外のアメリカ系奉仕クラブは、殆ど全てこの考え方であります。ライオンズクラブ然り。シビタン、コスモポリタン、皆然りであります。

ところが、ロータリーだけは、職業を営む心も奉仕の心も、共に同じ一つの心、つまり、所得獲得のために考えるエネルギーと、世のため人のために考えるエネルギーとは、その向かっている方向は異なるが、その行動を起こす元になる心は一つの心である、と考えるのであります。

詰まり、ロータリーは、一つの心をもって、職業を営み、且つ奉仕すると説くのであります。換言すれば、世のため人のために奉仕する心をもって職業を営むべし、と説くのであります。したがって、この考え方では、必然的に職業を営む過程プロセスに、世のため人のためという倫理性を要求することにならざるを得ないのであります。

さて、私達は、倫理の問題を考えるとき、人間の行動パターンを考えてみる必要があります。それは『打算の世界』と『愛情の世界』に分けることが出来ます。これは、『情理兼ね備える』という考え方にも通ずるものであります。打算の世界は『理』の世界、愛情の世界は『情』の世界であります。

(1)『打算の世界』とは、人間が価値を求めて行動する分野であります。人間は、本来、価値のないものは相手に致しません。例えば、１万円の商品と１万円の貨幣とが交換されるのは、その交換によって売主・買主双方にそれぞれ何らかの利益があると考える時に、はじめてこの等価交換は成立するのでありまして、一方が交換によるメリットがないと判断した場合には、この等価交換は成立致しません。このように打算の世界とは、人間が等価交換の原則の下で常に何らかの価値を求めて、打算によって行動する分野のことであります。

(2)『愛情の世界』とは、貨幣価値等では計ることの出来ないほど価値のある世界、そこには、打算や等価交換の原則などは、一切存在しない、そのようなものを一切必要としない世界、例えば、夫婦の関係のように、私のものは貴方のものよ、貴方のものは私のものよ、という考え方の支配する世界であります。そこには、一切の打算がありません。しかし、限りなき愛情があります。この価値は、計り知れないものと言わなければなりません。

ところで、打算の世界では、等価交換が終了するまでは、人と人とが関係づけられていますが、一旦、交換が終了すると、その人間関係は貸し借りなしに精算されてしまいます。例えば、１万円の商品と１万円の貨幣が交換されることによって取引は終了し、売主・買主の間は、一切貸し借りなしに精算されて、後には何も残りません。

ところが、愛情の世界では、例えば、妻が夫の仕事のために、実家から貰った金銭を提供し、それが返して貰えないことになっても、それを裁判にかけてまで請求することは絶対にありません。その限りにおいて、精算されないままに因縁が残っています。打算の世界から見れば、将に損をしたことになるのでありますが、それを損と

は考えない、つまり、打算的思考の圏外にある思考であります。そこには、一切の打算がありません。しかし、限りなき愛情があります。

さて、そこで、私達の職業の中にも、只管この愛情の世界にのみ生きてきた職業があります。例えば、宗教家の世界も愛情の世界であります。僧侶は、只、ひたすらに仏の道を説きます。それは、御布施を求めて仏の道を説くわけではありません。人々に対する限りなき愛情をもって、人々の悩みを救うために、ひたすら仏の道を説くのであります。その結果、人々が感謝の気持をもって、御布施を差し出せば、感謝の気持をもってそれを受けとるのであって、それは、あくまでも結果の問題であります。

したがって、もし人々が貧しくて、御布施を差し出すことが出来なければ、出さなくともよいのでありまして、それを僧侶の方から請求すべき筋合のものではありません。したがってまた、この関係は、精算されないままに、僧侶の生活は、その分だけ社会に対して貸し方になっているのであります。その故にこそ僧侶は、世の中から尊敬と信頼をもって報いられるのであります。

これは何も宗教家に限ったことではありません。中世ヨーロッパにおいて、宗教から派生した法学、医学、哲学、教育学、皆然りであります。(University)

ロータリーは、これらの分野の職業を一括して profession 専門職業と称し、利潤追求を第一義とする business 実業と区別しているのであります。したがって、宗教家をはじめ大学教授、弁護士、医師等は、神様から与えられた客観原理をもって人々を救済することを第一義とする職業である、と考えられているわけであります。このことの一つの名残として、これらの職業は、報酬を受け取っても領収証に収入印紙を貼る必要がありません。

実は、職業奉仕というのは、この愛情の世界の考え方をもって、打算の世界をコントロールして行こう、という考え方であります。これが職業奉仕の根本原理であります。

愛情の世界は、人間関係が精算されないで、常に人と人とが或るものによって因縁ずけられている世界、色々な出会いがいつまでも尊重されて行く世界、そういう関係の中から尊敬と信頼が生まれて来るのであります。

実業家の場合には、尊敬と信頼に加えて更に信用が生まれるのであります。尊敬と信頼そして信用があるからこそ実業家は、長期的に安定した経営をすることができるのであり、個々の取引が常に貸し借りなしに精算されていく打算の世界からは、尊敬も信頼も信用も生まれないのであります。

このように、世の中の成功した実業家は、必ず、愛情の世界の原理をもって、自分の企業をマネージしているのであります。

したがって、先程の１万円の商品の売買の例で謂えば、売主と買主の間に、商品と貨幣の交換（目に見える世界）と同時に、感謝と満足の交換（目に見えない世界）がなければならない、とロータリーは説くのであります。

要するに、ロータリーは、倫理運動の立場から、愛情の世界に生きる心、つまり、世のため人のための心をもって職業を営んでいると、その結果として、『信用』という保護膜に包まれて、長期的には安定した利潤を着々と獲得する強靭な体質の企業を作り上げることが出来ると説くのであり、その原理の総体を職業奉仕と呼んでいるの

であります。

さて、職業奉仕の総論とも謂うべき原理の話は、これ位に致しまして、次に職業奉仕の各論、即ち、実践の話も少しだけしておきたいと思います。

そこで、職業奉仕というものは、これを一言で要約すれば、職業を倫理的に営むべし、或いは、倫理的な商売を営むべし、ということなのでありますが、では、職業を倫理的に営む、ということは、具体的にはどのようなことなのか。

それは、各職種によって千差万別、一人々々のロータリアンが自分の能力に応じて色々な方法を開発しなければなりません。自由競争社会は自己責任の社会でありますから、これは当然のことであります。ただ、その千差万別に、且つ無数に開発される方法を或る原理によって類型化することは出来ます。

そこで、私達が職業を営むについて具体的にどのような行動をとるべきなのか、その行動の原理を見ておかなければなりません。これが職業奉仕各論の課題であります。

その課題の一つとして、同業者の問題があります。ロータリーは親睦を守るために一つの職種からは一人だけ会員を採り、他の同業者は入会させません。しかし、ロータリアンは、同業者と共に栄えていかなければなりません。そこで、同業者共存共栄が職業奉仕の一つの指導理念となるわけであります。

一つの事例を出します。或る有名な菓子屋であります。いつも午後３時頃になると、商品が売切れてしまいます。有名な店でありますから、作れば作るほど幾らでも売れるのでありますが、午後３時頃になると売切れてしまう、その程度の商品しか作らないのであります。それは一体何故か。

確かに、作れば作るほどいくらでも売れます。儲けに儲けることは出来ます。しかし、自分の生産能力を越えて、150% 200%の商品を作れば、儲かるかも知れませんが、反面、粗悪品の出る可能性も出て来ます。

一つでも粗悪品が出ると、お客様に御迷惑をかけることになり、更に、自分の信用を傷つけることにもなります。信用というものは、金銭をもってしては贖うことの出来ないほど価値のあるものであり、一旦失ったら取り返しの付かないものなのであります。したがって、この菓子屋は、精魂込めて自分の生産能力の８０％ の商品しか作らないのであります。これが職業の倫理であります。そして、自分の生産能力を越える注文に対しては同業者の方へ譲るのであります。これが同業共存共栄の倫理であります。このように、古来、人間が徒らに金を求めて身を滅ぼした例は枚挙に暇がありません。しかし、人間が心を求めて身を滅ぼしたことは、未だその例を聞かないのであります。

ロータリーは、倫理の裏打ちのある企業活動こそが永続的に安定した利潤を獲得し、自由競争を必ず勝ち抜いて行くということを原理論的にも実践論的にも立証して行くものなのであります。

では、現実にそのような事実があるのか。既に立証されている事実としては、１９２９年に始まるアメリカ経済社会を襲った空前絶後の大パニック、その時、ロータリアンは一人も倒産していないというのであります。

これは、ロータリアンが例会における発想交換機能を通じて、倫理的な企業活動のノウ・ハウを開発し、それを自らの企業に

実践してきた功徳だと謂われているのであります。この故に、ロータリーの職業奉仕は、不況期に強い哲学である、とも謂われているのであります。

では、ロータリアンだけが倒産せずに生き残ればよいのか。というと、そうはありません。ロータリアンは、職業奉仕の原理を実践することによって自由競争の勝者になることができます。そして、勝者になる過程において、自由競争に破れて行った敗者の代弁者となって、世のため人のために力を尽くさなければならない、ということをロータリーは説いているのであります。

殊に、ロータリーは倫理運動の視点に立って、同業者関係や下請関係においては、常に倫理を提唱し、共存共栄の道を模索すべきことを説くのであります。これは、職業奉仕の大きな柱であり、ロータリーが倫理運動であることの面目躍如たる場面なのであります。

この故に、ロータリーは、人類文化史が２０世紀の時代に刻印を打った職業人の最も優れた倫理運動なのであります。ここにロータリーの真髄があります。

このことは、標準クラブ定款第５条の「目的」において、明確に表現されているところであります。

以上を要するに、同業関係を貫く指導理念は、同業共存共栄であります。したがって、ロータリーの職業奉仕は、如何にすれば同業共存共栄の実を上げることができるかの原理を説くものであります。

では、具体的には、一体どのような方法によるべきなのか。

ロータリアンは、自由競争社会において、職業奉仕を実践することによって必ず勝者になります。その勝者になる過程において、或いは勝者になった後で、敗者の代弁者になって救済の手を差し延べなければなりません。

では、その方法は何か。それは、自分が成功して勝者になったノウ・ハウを敗者に公開することであります。

では、何故、ノウ・ハウを公開するのか。それは、自由競争から来る同業者間の疑心暗鬼や危機感を払拭して、同業者共存共栄の実を上げるためであります。

ロータリアンがクラブ例会に出席して得た諸々のIdeaを、自分の企業に適用することにより成功したならば、そのノウ・ハウを同業組合にもって行って、同業者に披露するのであります。

ただ、先程申し上げましたように、ノウ・ハウを公開すれば、自由競争に負けてしまうと考える人がありますが、実は、返って共存共栄の実が上がるのであります。重ねて申し上げますが、ここに所謂ノウ・ハウとは、産業秘密的なものではありません。成功することが完全に立証されたノウ・ハウのことであります。何故なら、もし、成功することが立証されていないものを公開して、それを適用した人が失敗すれば、その人に迷惑をかけ、世のため人のためにはならないからであります。

元ＲＩ会長ハーバート・テイラーが、１９３２年に倒産したアルミ食器会社の再建を依頼され、約１０年後に一流の企業に育て上げました。それを見たシカゴ商工会議所の人達が、テイラーに対し『君は素晴らしいことを成し遂げた。何か秘密があるだろう。手のうちを明かせよ』と言ったところ、テイラーは『実は、四つのテストというものを考案して、皆で力を合わせて頑張ったんだ』と答えました。そこで、商工

会議所の人達は、『そのノウ・ハウは、君が成功したことによって完全に立証されている。それを皆に披露しよう』といって商工会議所傘下の企業家達に公開されることになったのであります。

これを見て、シカゴロータリークラブの会員達が、『それをロータリーへ譲らないか』ということになって、１９５４年、彼が国際ロータリーの会長に就任したのを契機に、その版権を国際ロータリーへ譲り渡したのであります。

これは商工会議所からロータリーへ逆輸入された例でありますが、本来は、ロータリークラブでノウ・ハウを開発し、それを同業共存共栄のために同業組合で公開し、更に商工会議所で公開するというのがロータリーの奉仕の図式であります。

事例を紹介しておきます。

西ドイツが未だシュミット首相の時代の古い話であります。首相が破産寸前のイタリアを救うために、返済の見込みのない２０億ドルの借款を与えようと議会に提案した時に、議会の反対に対してシュミット首相は、『イタリアの崩壊はヨーロッパ共同体の崩壊を意味する。ヨーロッパ共同体が崩壊すればドイツも危ない。したがって、ドイツが生き延びるためには、イタリアを救わねばならない』という論理をもって議会を説得したのであります。

実は、この問題は、既にお気づきのように、昨今のＥＵにおけるギリシャ危機とその論理構造は全く同じであります。 したがって、この問題は、ギリシャのみならず、ＥＵ全体の浮沈に関わる大問題でありますが、今日は時間の関係で割愛致します。

何はともあれ、他人を生かしてこそ自分の生きる道もある。ロータリーの説く共存共栄というのは、かなり厳しいところがあるのでありまして、このことも心に止めておかなければならないと思います。

ロータリアンは、よく「相手の身になって考える」ということをいとも簡単に言いますが、「相手の身になって考える」ということが非常に厳しいものであること、そして、そのことがこれからの時代を生き抜く道でもある、ということを心に留めておかなければならないと思うのであります。

要するに、自由競争には、甘えの論理は全くありません。したがって、自由競争を前提とする職業奉仕にも甘えの論理は毛頭ありません。時々、誤解をして、奉仕というある種のロマンチシズムに酔って、競争意欲をなくしてしまう人があります。即ち、自分はロータリークラブを退会して、自由競争で思い切り金を儲けた後、再びロータリーに入会して奉仕するという人がいますが、これは職業奉仕を誤解しているものであります。

職業奉仕は、同業者との関係では闘争の論理であります。甘さは一切ありません。ここは大事なところであります。したがって、闘争に勝とうと思えば、職業奉仕に徹することであります。したがって、職業奉仕の判らないロータリアンは自由競争に敗れていくと思います。

最近、ロータリーを辞めていく人が増えていますが、これは職業奉仕が判らないからであります。本当に職業奉仕が身に付いたならば、ロータリーを辞めることは絶対にありません。職業奉仕の魅力の虜になって、隆々と栄えて行くだろうと思います。

自由競争社会を生き抜いていく時に、勝利者になる過程において、敗者を救済しながら栄えていく、共存共栄の道を模索する

ことによって、初めて、自分は、一私企業の社長にとどまらず、世のため人のための支柱にもなっているという自覚を持つことができるのであり、そこで初めて自分のためのものである職業が同時に人のための奉仕にもなるのであります。

ここに人生の意義があるのでありまして、自分のことしか考えない人生には、何らの意味もありません。自分も儲けるが、その儲ける考え方は、同時に、周りの人達も儲ける策を作って行く、こういう形になって、初めて、二度とない人生を意義あらしめることができるのであります。

一回きりの人生において、ロータリーの真髄を究めることは、美しいことであり、また、尊いことでもあります。花は散るから美しい、と思います、人も死ぬから尊いとも思います。桜の花も、一年中、咲いていたら、美しいとは思いません。桜の花は一週間ほどの命、それも、人に見て貰おうと思って咲いて居るわけではありません。精一杯咲いて散っていく。だからこそ、美しいのであります。

人も死ぬから尊いのであります。世間に認められても、認められなくてもよい、精一杯生きて散っていく。そこに人の尊さがあると思います。

音楽でも名曲を聴けば余韻が残ります。何時までも余韻が残っていくように、私達の人生も、認められても、認められなくてもよい、精一杯生きていく、そのことが大切であります。ロータリアンも職業人として職業奉仕で精一杯生きて行くことが大切であります。

では、どのように生きていくのか、というと、全てのことに感謝して、お陰様で、という謙虚な気持で生きていく。そうすると死んでも余韻が残っていくものであります。肌触りのよい人は、死んでからも良い人でしたね、もっと、もっと生きて居て欲しかったなあ、と余韻が残ります。

それは、一体何故か。ローマは一日にして成らず、という言葉があります。ローマが栄えたのも、一朝一夕に成ったものではありません。毎日々々の積み重ねがあって、そして一生涯の終わりに死という緞帳が下りた時、後の人にどのようなものを遺したか、ロータリアンは、余韻を残して死にたいものと思うのであります。

ご静聴有難うございました。

「ＲＹＬＡの真髄～人間の魂の在り方～」
ＲＹＬＡ学友会創立１０周年記念講演

2017. ９. ３

深　川　純　一

当地区の青少年奉仕プログラムの中で世界に誇るに足るものが一つあります。それが「ＲＹＬＡ」、即ち Rotary Youth Leadership Award 青少年指導者養成計画であります。これは今年度創立４０周年を迎えます。

そして、このＲＹＬＡの卒業生を以て組織された「ＲＹＬＡ学友会」、これも創立１０周年を迎えることになりました。月日の流れの速さ、そして、その尊さ、というものをしみじみと感じるのであります。

これは今まで如何に生きてきたか。そして、これから如何に生きるべきか、という思いを新たにするべき節目であります。

元来、人間の記憶というものは、月日が経つにつれて薄れて行くものであります。しかし、人間の魂に沁み通るような体験は、月日の流れと共に却って益々鮮明になっていくように思うのであります。

実は、今井先生の思い出は、色々と尽きることはありませんが、就中、鮮烈なショックを受けたのは、今から３９年前の第１回のＲＹＬＡでありました。今でも私の脳裏に鮮明に焼き付けられています。

元来、このＲＹＬＡは、今井先生に導かれながら始まったものではありますが、その後の私の生き方を変えてしまった、とも云えるのであります。それほど鮮烈な印象をうけたのでありまして、それは、私の人生における素晴らしい出会いの一齣でもありました。当時私は４８歳、今井先生は１０歳年上の５８歳でありました。

そこで、今日は今井先生のＲＹＬＡの基本構想を顧みながら、「ＲＹＬＡの真髄～人間の魂の在り方～」というテーマで少しお話をしたいと思うのであります。大袈裟なテーマのようでありますが、一言で云えば、「人間、如何に生きるべきか」という問いかけであります。

実は去年の１０月１６日、ＲＹＬＡ学友会の総会で「如何に生きるか」というテーマで少しお話をしました。それはＲＹＬＡ学友の吉川雄介君が、ネパールの人達の自立心の養成と国際交流のために、人生の或る時期に、一つの理想に燃えて、世のため人のための仕事に飛び込んで行かれた話であります。その勇気と行動力には、驚きと共に尊敬の思いを禁じ得ませんでした。

私は、この話を聞いて、今井鎮雄先生の蒔かれたＲＹＬＡの種が見事に花を咲かせていると思って嬉しくなりました。

昔、ＲＹＬＡが始まって間もない頃、ＲＹＬＡの種の話をしたことがあります。ＲＹＬＡの種は、ＲＹＬＡから地域社会へ戻った若者達の心に、直ぐに芽生えるかも知れない、或いは一年後かも知れない、或いは十年後かも知れない、或いは永久に芽生えないかも知れない。しかし、何時かは芽生えることを信じてひたすらに種を蒔く。そして、未来に夢を託す。これがロー

タリーの思想であり、ＲＹＬＡの思想でもある、という話でありました。

一寸、ロマンティックな話ではありますが、実際、ロータリアンもライラリアンも理想主義者であるべきであり、ロマンティストでもあるべきであると思います。そして、私達はこのロマンをこそ大切にすべきであると思うのであります。

このようにして、ロータリーは未来を夢見る思想であります。そしてその夢の一つが、世のため人のために動く人間を育てることであります。そして、そのことに大きな指標を与えてくださったのが、このＲＹＬＡの創立者今井先生でありました。

さて、そこで今井先生の構築されたＲＹＬＡの基本構想を分析してみますと、その核となる三つの柱を見取ることが出来るのであります。そこで、先ず、第１の柱は何か。それは、ライラリアンの個人倫理の確立であります。

個人倫理の確立。これは、人間は如何に生きるべきか、詰まり、人間の魂の在り方を問うものであります。したがって、これは、ＲＹＬＡの中核を為す部分であり、青少年のリーダーシップを養成するためには欠くことのできない一番大切なところなのであります。

実は、ロータリーは、１９１５年のサンフランシスコにおける国際大会において、【全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓】所謂【ロータリー道徳律】を採択し、ロータリアンの個人倫理を確立しました。これは、ロータリーの奉仕をロータリアンの個人倫理の問題として集大成したものでありまして、将にロータリーの倫理運動としてのハイライトでありました。したがって、ロータリー運動の一環として始められたＲＹＬＡにとっても、個人倫理の確立は最重要課題であります。個人倫理の確立。詰まり、人間の魂の在り方の問題、とは云っても、何も難しく考えることはありません。平たく謂えば、穢れなき魂をもった人を育てること、人を育てること、であります。

では、どのようにして人を育てるのか。

今井先生は、キャンプという手法によって人を育てることを考えつかれたのであります。普通一般にキャンプといえば、山の中とか、海岸の砂浜でキャンプファイヤーを囲みながら、歌を唄い、食事を楽しむという親睦の場である、と考えられていますが、今井先生のキャンプについての論説によりますと、一口にキャンプといっても色々な形態がありまして、今井先生のこのＲＹＬＡの基本構想には、その根底にキャンプにおけるグループ・ワークの考え方があった、ということを見取ることが出来るのであります。

先生は、戦後、１９４９年、シカゴのジョウージ・ウイリアムズ・カレッジでグループワークを学ばれたのですが、その際、キャンプというものを、単なる親睦の場と捉えるのではなく、人を育てる教育の場として捉えて居られます。

そして、キャンプの役割から説き起こし、キャンプの沿革、キャンプの形態、キャンプと社会との関連、などについて実に詳細な論証をして居られるのであります。そして、次のように集約して居られます。

即ち、「時代が移り変わっていく中で、野外プログラムを中心にした、フレッシュエアー・スタイルのキャンプと呼ばれるものも、その強調する教育のポイントが変わってきた。そのために、グループワー

ク・スタイルのキャンプも、プログラムの展開の技術とか、リーダーシップのあり方とか、キャンプの場所の設定の基準、などが変わって来ている。

例えば、１９５１年に神戸ＹＭＣＡは、グループワーク・スタイルのキャンプを完成させるため、２週間の長期キャンプを余島で行った。

学校教育を補完するような長期キャンプ。これは、ほかにも例が見られたが、この余島のキャンプは、子供達の人格形成と成長に合わせたものであって、戦後の新しい試みの一つであった。そのため、キャンプリーダーは、キャビンカウンセラーと名称が改められただけでなく、キャビンの中で、グループ・カウンセリングを行うリーダーとしての訓練が必要となった」と説いて居られます。

これは、将にこのＲＹＬＡの原型とも云うべき考え方であります。つまり、従来のキャンプリーダーに換えて、カウンセラーシステムを導入し、そのカウンセラーにキャビン毎のグループ・ワークのカウンセリングを行わせるというシステムを採ったわけであります。将に、今までのキャンプ、という既成概念をうち破った真に斬新な発想であります。(「時を刻む」2006.5 刊)

このように、このＲＹＬＡの基本構想の根底には、今井先生のキャンプというものに対する深い洞察を看取ることが出来るのであります。したがって、ＲＹＬＡのカウンセラーの人達も、今井先生の説かれたカウンセラーの存在意義をしっかりと心に留めておいて頂きたいと思うのであります。

そして更に、今井先生は言葉を継いで、「現代は、高度に技術化された社会であって、そのために孤独な人間を沢山生み出しており、他人との交わりが薄くなってしまった。その結果、家庭内暴力となったり、命の尊厳が損なわれたり、技術が倫理を無視する、というような状況が出てきている。

このような時代だからこそ大事なことは何か、と謂うと、キャンプファイヤーを囲んで、永遠の友情を誓い合う感動的な経験や、静かに海の彼方に沈んでいく夕日を見つめながら、謙虚に自然の大きさと作られたものの小ささを感じるというキャンプでの経験は、人間にとって、より重要な意味を持つことになるであろう」と説いて居られます。人を育てるために、ここは一番大事なところであります。赤く燃えた太陽が、水平線に沈んでいく大自然の情景、これは私達が一度は経験したことのある情景であります。このような情景は、何度も何度も反芻して味わい、心を豊かにして頂きたいものであります。

このような情景に出遇って、人は、この宇宙を統べてある大いなるものの存在を悟り、人間の創りだしたものの小ささを知るのであります。そこから謙虚な心が生まれ、素直な、素朴な人間に育っていくのであります。言葉を換えれば、人間は素直に、素朴に、そして、謙虚に生きていくことによって、初めて人は、大いなるものの存在を知り、魂の在り方を悟ることが出来るのであります。

以上を要するに、今井先生は、キャンプというものを単なる親睦の場として見るのではなく、人を育てる教育の場として捉えられているのであります。このことによって、キャンプというものの教育効果が、如何に重要であるかが解るのであります。

次に第２の柱は何か。それは、ＲＹＬＡを運動体として構成する原理。詰まり組織

原理確立の場面であります。即ち、ＲＹＬＡのプログラムを合理的に管理し、運営するための組織原理を確立しなければなりません。

そこで今井先生は、ＲＹＬＡの教育効果を上げるために、講師の選定、基本的プログラムの設定、そして、カウンセラーシステムの形成、更にディスカッションシステムの作成、などの組織原理を確立されたわけであります。

そして、毎年卒業する受講生、詰まりライラリアンは、そのままでは、烏合の衆にすぎませんから、これを合理的に管理する原則が必要になります。

そこで、ＲＹＬＡ学友会を組織することによって、これらライラリアンを更に高度な人格に育て上げるための組織原理を確立されたのであります。

これは、ＲＹＬＡ学友会の組織を運動体の側面から集大成したものであります。

このように、ＲＹＬＡの本質を分析する場合に、一つは、ＲＹＬＡを思想の中心から眺める、そのことによって、個人倫理の要素を分析することであり、もう一つは、ＲＹＬＡを運動体として分析すること、これが大切なのであります。

このようにして、二つのルートからの分析によって、ＲＹＬＡの本質は解るのでありますが、そこで、最後に残された課題は、ライラリアンの実践の問題をどのように処理するか、という問題であります。

そこで、第３の柱は何か。それは、時代の変遷と地域社会のニーズとの関係であります。月日の流れと共に、世の中の状況は刻々と変化していきます。したがって、日々に新たに、日にまた新たに変動する地域社会のニーズ。このニーズに対して、ライラリアンが如何に実践していくべきか、という問題であります。

毎年、春にはＲＹＬＡの受講生が卒業します。ただその時点では、受講生達は、ＲＹＬＡの本質と原理が解っただけであって、実践の体験は、全くありません。ＲＹＬＡの実践は、彼らが地域社会へ帰った時から始まるのであります。

そこで、今井先生は、第一回のＲＹＬＡ終了後、間もなく、アドヴァンスコースによって、ＲＹＬＡ修了生に実践を学ぶ機会を設定されました。

この趣旨は何か、というと、ＲＹＬＡで原理を学んだ修了生に対して、地域社会への実践を学ばせ、体験させることによって、そのような修了生が、毎年々々ＲＹＬＡを巣立って行けば、ＲＹＬＡの原理と実践を兼ね備えた、真のライラリアンが育つという考え方であります。

そして、この考え方が、やがてＲＹＬＡ学友会の創立に繋がって行ったのであります。詰まり、ＲＹＬＡの実践原理が確立されたわけであります。したがって、これは、実践の視点からするＲＹＬＡの集大成でありました。

このようにして、ＲＹＬＡは、学友会によって原理のＲＹＬＡから実践のＲＹＬＡへと一歩を踏み出したのであり、ＲＹＬＡの本質について残されていた最後の課題は、実践の問題であったのであります。

ただ、このようにして原理の体系は確立したのでありますが、では、この確立された原理を具体的にどのように実践するべきか、ということが一番大事な問題なのであります。そこで、地域社会に存在するニーズに対して、如何に適切に実践することが出来るか。

この問題については、冒頭で紹介した吉川雄介君が素晴らしい実践をして居られるように、既に、ライラリアンの皆さんは、各地域で沢山の実践をして居られることと思います。私がフェイスブックで知る限りでも、数名の人達がローターアクトその他の場面で色々と活躍して居られます。

そこで、大事なことは何か、というと、これらライラリアンの皆さんが、学友会を通じて、お互いの実践情報を交換することであります。このようにして様々な発想を交換することによって、実践の効果を一層高めることが出来るのであります。

発想の交換。これは、初期ロータリーが創立以来、諸々の原理開発のために育んできた最も重要な機能なのであります。

さて、実践の具体例として参考までに、先ず、吉川雄介君のネパールにおける実践を紹介しておきます。これは、学友会の小林雅美さんに教えて頂いた情報であります。

それによりますと、吉川君は、一昨年、教育関係の勤務先であった「ベネッセ」を退職し、数人の仲間をもってＮＰＯ法人を立ち上げました。そして、発展途上国の教育支援の仕事を本業にしているとのことであります。

その具体的な活動内容としては、第１に、ネパールの農村の教育支援の実施があります。

これは、教師のトレーニングとか、現地の文部省への政策の提言をしたり、教師がいなくても学習出来るような映像授業を制作して、それを無償で提供することであります。

第２に、日本とネパールをインターネットでつないだ国際交流事業の実施であります。これは、日本の学校とネパールの学校をスカイプというインターネットテレビ電話でつなぎ、同世代の学生が国際交流を行う事業であります。

これは、日本のグローバル化教育の支援の一環であります。

第３に、日本の２０歳代の若者のキャリアを形成支援するセミナーの実施であります。これは、若者達に多様な生き方や働き方があることを伝えるために、様々なゲストを招いてセッションを行います。そして、自分の意志で選択し、キャリアを身につけていくための自信を付けさせる事業であります。

以上の活動を一言で集約しますと、ネパールの人達の自立心の養成と、国際交流ということになろうかと思うのであります。

吉川君は、家族は奥さんと子供一人とのことでありますが、何はともあれ。人生の或る時期に、一つの理想に燃えて、世のため人のための仕事に飛び込んで行かれた勇気と行動力。これは、本当に素晴らしいことだと思いました。

これは、「人間、如何に生きるべきか」。ということについての吉川君の自分自身に対する問いかけであり、且つ、その解答あろうかと思います。したがって、これは将に、人が育つための心の問題、つまり、「人間の魂の在り方」を問うものであります。

そこで、このことについて、申し添えておきたいことが一つあります。

それは、第２回ＲＹＬＡから始められた「思索の時間」であります。

では「思索の時間」を設けた趣旨は一体何か、と謂いますと、第１回のＲＹＬＡが終わった後の反省会において、カウンセラーであった姫路ＹＭＣＡの篠原さんが、自分のキャビンでは「瞑想の時間」というものを持った、ということを報告されまし

た。私はこれは素晴らしい発想であると思いました。

ただ、私は単なる瞑想というのでは少しもの足りない、もう一歩突っ込んで思索を深めるべきものではないか、と考えたわけであります。

実際、「ロータリアンは思索する人でなければならない」ということを説いた人が居ます。関東大震災のときの 国際ロータリー会長 Guy Gundaker であります。

そこで、これは瞑想の時間よりも思索の時間の方が適切であると考えたわけであります。

実は、戦前の日本の高等教育は、先ず、旧制中学校で５年間の教育を終えて卒業しますと、次の旧制高等学校の３年間は、専ら語学と哲学その他の教養科目のみを徹底的に教育するのであります。そして、大学に入学して、初めて各教科に分かれて、専門科目を教育するという制度でありました。

昔、仙台の旧制第二高等学校では、入学式で校長が、新入生全員に親鸞聖人の「歎異抄」を配って、これを読むことを奨めたそうであります。

これは、一体何を意味するのか、と謂いますと、高等学校在学中の三年間は、人間とは何か、ということを徹底的に思索させる知的修練を目的としているのであります。将に、人間の魂の在り方を問う教育であります。この哲学的な思索の基礎があって、初めて、それに続く大学の三年間の専門的な教育が、人格形成に大きな効果を発揮することになるのであります。

事実、戦前の学生には、人間とは何か、を問う哲学的な思索の場が与えられていました。また、思索の時間も十分に与えられていたのであります。

しかし、戦後は、敗戦によって、食べるものも、着るものも、住むところも失ってしまいました。したがって、私達は、先ず生きる、ということに追われて、物事を思索する余裕を失ってしまったのであります。その結果、やがて月日の流れと共に、人間如何にあるべきか、という倫理教育を怠るようになって、遂に、昨今のような様々な不祥事を起こすことになってしまったわけであります。倫理教育なくして人を育てることは出来ないのであります。

何はともあれ、人間にとって思索することは大事なことであります。即ち、或る時は、世俗の一切の情報を遮断して、ひたすら思索に耽ることが大切である、と思うのであります。この点、ＲＹＬＡの四日間は、新聞もラジオもテレビもない世界でありますから、情報を遮断して思索するには最も適した環境であると謂えるのであります。

そこで、せめて「思索の時間」の一時間だけは、世俗の憂きことも楽しいことも一切を忘れて、ひたすら思索に耽る、そして、自分を見詰めることが大切であります。そのことによって初めて立派なリーダーが育つと思うのであります。これが、思索の時間を設けた本来の趣旨であります。

なお、思索のために情報を遮断することについて、一つの話を申し添えます。

これは、私のロータリーの親友の話であります。彼は、毎年真夏の約一ヶ月を、唯一人で森の中の山小屋で過ごします。テレビもラジオも新聞もないところで、一切の情報を遮断して、思索の時をもつのであります。

彼が何を考えていたのか、一切判りませんが、恐らく企業経営のことをはじめ、世界的視野で世の中万般のことを考えていた

のであろうかと思います。兎に角、自分を或る期間そのような空白の時間の中におくことによって、自分を見つめ、思索を深める、そのことによって色々な発想も授かるのであろうかと思います。

ただ、このような優雅な生活は、私達の到底出来ることではありません。

しかし、考えてみれば、私達の日常生活でも、やり方次第では、１週間に一度とか、１ヶ月に一度という方法で、情報を遮断して思索する時間をもつことは出来るのであります。参考までに申し添えておきます。

次に、社会のニーズを実践するについて留意すべき事案を紹介しておきます。

これは青年海外協力隊の話であります。或る時、この協力隊の人達が東南アジアの或る村に逗留しました。協力隊の奉仕活動は、村の人達に大変喜ばれました。或る時、協力隊は、村人達の自立心を育てるために竹籠を作って売ることを教えました。しかし、彼らは一向に竹籠を作ろうとはしなかったのであります。不思議に思いながら半年ほど経った頃、その村の一人の老人が竹籠を作って商っていたことが判ったのであります。自分達が竹籠を作れば、老人の生活を奪うことになる、つまり、村人達に老人を思いやる心があったのであります。

この事例で判るように、世のため人のための奉仕を実践する者は、先ず、社会のニーズを調べなければなりません。ニーズのないところに奉仕の実践はありません。ニーズなき奉仕は押しつけであります。したがって、独りよがりの行動には気をつけなければならないと思います。

実は、このようなことは、ロータリーの世界でもよくある事例であります。ロータリアンもライラリアンも心に留めておくべきことであります。

さて、今一度、ＲＹＬＡの原点に立ち返って見て、今井先生がこのＲＹＬＡで育てようとされた青少年のリーダーとは、一体どのようなものであったのか。

それは、決してエリートの指導者を育てるのではなく、地域社会の草の根の若者達の中から地域社会、国際社会に役立つリーダーを育てようとして居られたと思うのであります。

そのことを裏付ける事実の一つとして、肢体不自由児キャンプがあります。

先ず、私がこの余島に来て初めて知ったことの一つに、今井先生が戦後、日本で初めて、この余島で手がけられた肢体不自由児キャンプがありました。

先生は、１９５０年、アメリカを旅行中に新しい試みを二つ発見されました。その一つは、肢体不自由児のためのキャンプであり、もう一つは、「肢体不自由児のためのキャンプ」という本でありました。

先生は、このことについて、次のように述べて居られます。即ち、「この二つの発見で、私は、障害を持つ子供が社会から隔離され、時には家族すらそのような子供がいることを隠しがちで、また、福祉施設がともすれば地域に背を向けて存在するような日本の状況を考え、この肢体不自由児キャンプは、大切な啓発運動の始まりとなるのではないかと考えた」そして、言葉を継いで、「アメリカ社会を福祉的視野で見ると、人々が「弱い」人達と共に地域社会の中で生きて行こうとする姿勢は、非常に印象的であった。このような経験が、私がＹＭＣＡでキャンプ・プログラムを展開する大きな契機となったのである」と述べておられます。余島のキャンプの原点は、実

にここにあったのであります。

また、時は下って、１９８０年、今井鎮雄先生が国際ロータリー２６８０地区のガバナーに就任された時、国際ロータリーは「世界理解賞」というものを創設しました。そして、第１回の世界理解賞を神戸大学の岩村昇博士に授けました。

この賞は、岩村先生が開発途上国の人達に自立心を育てるために、ネパールで２０年間にわたって、結核の予防と治療に献身されたことを表彰するものでありました。そしてこの賞は、その後も一国の大統領とか学者、その他世界人類に献身された人を表彰しているという非常に名誉ある制度であります。

そこで、岩村昇先生にロータリーの第一回世界理解賞が与えられた時に、その賞金を以て設立された財団があります。これをＰＨＤ財団（Peace, Health, Human Development) と謂うのであります。そしてこの賞金は、岩村先生自身が使うのではなく、先生の働きを引き継いでいくリーダーシップを養成するために使う、という条件が付いているのであります。そして、今井先生がその財団の理事長に就任されたわけであります。したがって、この考え方はＲＹＬＡの発想と全く同じであります。

では、ＰＨＤ財団は、具体的には、どのような仕事をしているのか、と謂いますと、毎年、アジアや南太平洋から研修生を日本に招きます。それは、その地方の草の根の人達、即ち、漁師、お百姓、村の女性等々であります。

但し、エリートは除きます。それは一体何故か、といいますと、現地の人々を絶対的貧困から救い出すためには、草の根の人達自身に、食料を増産する意欲とか技術とかを持たせることが、どうしても必要だという考え方であります。

更に、何種類かの食事をとることにより、栄養のバランスがとれる、という栄養と料理の知識と知恵、これを草の根の母親達が知ることが出来れば、八割の病気がなくなるという公衆衛生学上の計算でもあります。

要するに、開発途上国の人達に自立心を養成し、自分達の力で生きていけるようにするために、東南アジアの草の根の人達から研修生を募り、米山奨学生として日本に留学させます。そして、技術を習得させた後、祖国に帰し、地域社会のリーダーとして、その国の発展に寄与させるという制度であります。

これは、将にロータリーの世界社会奉仕の発想でありまして、岩村先生はロータリアンではありませんから、この「ＰＨＤ財団」の発想は、恐らく今井先生の発想であると思うのであります。しかも、これは、余島のＲＹＬＡと同じ発想であり、ここにも弱きものを慈しむ今井先生の温かい心を見取ることが出来るのであります。

また、弱きものを慈しむ今井先生の目は、職業社会や地域社会のみならず、国際社会にも向けられているのであります。

先生は、２００５年、インドで開かれたポリオ・サミットに、ただ一人で出席されました。これは、確か正月早々で、皆が休んでいる頃であったかと思います。このとき、次のように述べて居られます。『日本からは、私一人でしたので、日本の存在は目立ちません。どころが、アフガニスタンから来ていた人が云いました。「アフガニスタンのポリオ撲滅のために大きなお金を送ってくれたのは日本です。お陰でポリオ

はだんだん減っています。ここに、日本から代表が来ているので、私は、公に日本にありがとうと言いたい」と発言されました。

私達が世界から期待されるものは何か。日本のロータリアンが、今、行っている奉仕が、世界における日本への信頼を築く上で大きな役割を果たしています。

その意味で、私達ロータリアンは、日本の良心を代表していると言えないでしょうか。世界の人々は、私達の奉仕の業を通じて日本を立派な国だと思ってくれているのです。

今、私達の国は、教育も駄目、経済も駄目、政治的信用も得ていない。日本は地球の上でしょんぼりした国になるかも知れません。しかし、どんなに苦しい時も、ロータリーを通した私達の働きが、世界の人々にとって大事な働きであり、それによって、世界の人々が日本を認めてくださるなら、やはり、私達はやり続けていくべきではないでしょうか。

日本の人からも、世界の人からも、「あなたは、ロータリアンですか、世界の人達のために、地域の人達のために、弱い人達のために、あなたが働いてくれているのですね。有り難う」と云って手を握られるような、そういうロータリアンになりたいものです。』と話されました。

これは将に、何時も高々と理想を掲げ、それを堂々と提唱する理想主義者今井先生の面目躍如たるものがあります。今井先生の言葉は、何時も人々に対する愛情をもって、諄々と説いて温かく、且つ、世界的な視野をもって鋭いものがあります。

しかも、当時、既に８４歳の今井先生が、将に老骨に鞭打って、一人でインドまで行かれたこの使命感と情熱、そして、弱きものへの愛情と献身、唯々頭の下がる思いがするのであります。

ところが、このような今井先生の生き様、詰まり、先生の生涯をかけた懸命な使命感と情熱、そして、弱きものへの愛情と献身、このようなことなど思い起こしていますと、最近の世の中は、随分冷たくなったように思います。義理とか人情がなくなったようにも思います。

義理とは、物事の正しい道筋であり、人間の守るべき道理、人間のあるべき姿であります。人情とは、人に対する思いやりの心であり、慈しみの心であります。これは人間が本来持っている人間らしい感情であります。

ところが、最近は、義理も人情も失って、人々は孤独になったように思います。

しかし、昔ながらの義理と人情を忘れたとき、人間の社会は崩れてしまいます。義理は兎も角、人情まで捨てると世の中は崩れてしまいます。理性と論理だけでは、世の中はうまくいかないのであります。殊に戦後は人情が薄くなったように思います。

これは、高度経済成長で物質的に豊かになったことも一つの原因であろうかと思います。人間は豊かになると、自己主張が強くなって、争いやすくなります。そこに人と人との対立が生じます。この人間同士の対立を和らげるのは、論理だけではうまくいかないのであります。どこかで人情がないと駄目であります。

ところが、私達が今生きている資本主義社会は、自由競争社会なのであります。それは、弱者も強者も入り交じった、混沌とした闘争社会であります。勝利者もあれば、敗北者もあります。

そこで、この闘争社会を生き抜いていく

時に、敗者を救済しながら栄えていく、共存共栄の道を模索することによって、初めて、自分は一つの組織のリーダーであるに止まらず、世のため人のための支柱にもなっているという自覚を持つことができるのであります。どんなに小さな組織であっても、リーダーたるものは、この自覚を忘れてはなりません。

ここに人生の意義があるのでありまして、自分のことしか考えない人生には、何らの意味もありません。自分も栄えるが、その栄える方法は、同時に、周りの人達も栄える方法を考えていく、こういう形になって、初めて、二度とない人生を意義あらしめることができるのであります。

一回きりの人生において、ロータリーの真髄を究め、ＲＹＬＡの真髄を究める、そのことが出来れば幸せであります。しかし、それは簡単に出来ることではないと思います。

しかし、素直に、素朴に、謙虚に、精一杯生きていけば、時々はそのような体験が出来るかも知れません。詰まり、人間の魂の在り方を垣間見ることが出来るかも知れない、とも思います。

花は散るから美しい、と思います、桜の花も、一年中、咲いていたら、美しいとは思いません。桜の花は一週間ほどの命、それも、人に見て貰おうと思って咲いて居るわけではありません。精一杯咲いて散っていく。だからこそ、美しいのであります。

人も死ぬから尊いのであります。世間に認められても、認められなくてもよい、精一杯生きて散っていく。そこに人の尊さがあると思います。

音楽でも名曲を聴けば余韻が残ります。何時までも余韻が残っていくように、私達の人生も、認められても、認められなくてもよい、精一杯生きていく、そのことが大切であります。

では、どのように生きていくのか。

それは、全てのことに感謝して、素直に、素朴に、そして謙虚に生きていく、そうすると死んでも余韻が残っていくものであります。

それは、一体何故か。ローマは一日にして成らず、という言葉があります。ローマが隆々と栄えたのも一朝一夕に成ったものではありません。精一杯生きていく一日々々の努力の積み重ね、それがあって、そして一生涯の終わりに、死という緞帳が下りた時、初めて、その人なりの余韻が残るのであろうかと思います。

ご静聴有難うございました。

あ と が き

本年度、伊丹ロータリークラブは創立６０周年を迎えました。

振り返ると２００１年（平成１３年）に竹中秀夫会員の発案により始まった、ロータリー３分間情報『純ちゃんのコーナー』が１６年目を迎えました。

深川純一先生には長きに亘り、ロータリーの全てを色々な角度から３分間に凝縮し、例会に於いて卓話していただき深く感謝申し上げます。

今回は「ロータリー思想の理論構造」その１～その２３、『職業奉仕・この素晴らしきもの』東京２５８０地区職業奉仕委員会講演、「ＲＹＬＡの真髄～人間の魂の在り方～」ＲＹＬＡ学友会創立１０周年記念講演の内容で、ここに１６冊目となる『純ちゃんのコーナー』Part XVI の冊子が完成しました。伊丹ロータリークラブの例会でしか聞けない『純ちゃんのコーナー』を、我々会員が聞かせていただき、冊子を読み返すことによって、真のロータリアンに近づけると確信しております。

最後になりましたが、献身的にご尽力をいただきました深川純一先生には心より御礼申し上げますとともに、発刊に関しまして、前年度会長 船本洋会員、幹事 杉本啓次会員、伊丹ロータリークラブの会員の皆様、事務局の吉永様に深く感謝いたします。

2017 年 10 月　雑誌・ロータリー情報委員会